
セカンド・ラブ

一条雪雄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セカンド・ラブ

【Nコード】

N8387B

【作者名】

一条雪雄

【あらすじ】

中堅企業で働く大下雅夫と、高校生の桜田麗奈の恋愛物語。麗奈の母、舞はかつての雅夫の彼女だった。18年間封印していた恋心を、麗奈に舞の面影を重ねつつ麗奈と恋に落ちる…

第1話

『ねえ、智美、そろそろ会いに行こうかと思うんだけど…』

『彼に会いに行くの？卒業するまで待つんじゃないかなったっけ？』

桜田麗奈と山中智美はファーストフードショップで、ハンバーガーを食べながら話をしている。

麗奈と智美は都立高校の2年生。幼なじみでお互いの将来や恋愛を語り合える、いわゆる親友ってやつだ。

『うーん、そうんだけど…なんか早く会いたくなっちゃって』

『でもさ、彼に彼女や奥さんがいたらどうするの？』

『私のセクシービームでメロメロにして奪ってやるう』

『セクシー？誰が？』

『麗奈ちゃん』

自分を指差して言う。

『あのねえ、セクシーってのは私みたいのを云うの』

智美は背が高く均整のとれた顔と体付きで、雑誌の読者モデルをやっている。それに比べ、麗奈は背が低く、童顔で制服を着てなければ中学生に間違われるほどだ。

『わかってるわよ。言ってみただけ』

『第一、あんた一人で新幹線にでも乗ってたら補導されるよ』

『失礼ねっ、これでもしっかりメイクすれば少しは大人っぽくなるのよ』

『メイクって言ったって、いつもファンデーション塗ってリップひくだけじゃん』

さすがは幼なじみ。全てお見通しだ。

『ダメかなあ？』

『ダメじゃないけどさ。今度ちゃんと教えてあげるから。ケバすぎないメイクを』

『ありがとだぴょん』

『そんな言葉使つてると、彼にドンビキされるからね』

『わかつてるニヤン』

両手で猫耳の真似をする。

『会う前にそういう所を直さなきゃね』

智美が冷ややかな目をして言う。

『そんな冷たい言い方しなくてもいいじゃん』

『同級生に会いに行くんじゃないんだからさ、れっきとした大人に会っただよ。逆に麗奈のそんな姿を見て、萌えっなんて言われたらどうすんのよ？』

『イヤだ』

『でしょ？』

『ていうか、まーくんはそんな人じゃないもん』

『はいはい』

智美は携帯に目をやった。時間を気にしているようだ。

『仮に彼女や奥さんがいたとしても、まーくんに私の気持ちを伝えたいの』

『お母さんの気持ちも、でしょ？』

『うん、お母さんの手紙も渡さなきゃいけないし』

『でも普通さあ、親子で同じ人好きになる？信じられないよ』

『お母さんがまーくんの話ばかりするからさ…初めはなんとも思わなくて、ただ聞いているだけだったけど。いつしか私の中で想像から好奇心に変わってしまって、ついに愛情に進化してしまいましたあ』

定期入れの中から写真を取り出した。

『特別イケてるって訳じゃないんだけど、なんか惹かれるんだなあ、これが』

『実物も見ないで、愛情だなんてよく言うよ。その写真から20年位は経ってんだよ。デブでハゲてたりして』

智美は雅夫の写真を見て、今の姿を想像して笑った。

『何笑ってんのよ。デブでもハゲでもいいのっ！まーくんはまーく

んだもん』

麗奈が口を尖らせる。

『そこまで言い切れれば想いは本物ね』

『当たり前じゃん』

とは言いつつも、多少の不安はあった。

『おかげで彼氏を一切作らないもんだから、私達レスだと思われるし』

麗奈と智美は、四六時中一緒に行動してるので周りからはそういった目で見られてる。

『私にとっては好都合なのよ。告られるとウザイし。智美は迷惑なの？』

『私も男が寄りつくとも面倒くさいからいいんだけどさ』

『もし、私がまーくんに振られたらレスになっちゃおうか？』

『お断りっ。私だってちゃんとした恋愛と結婚がしたいもんね』

『智美に振られたよ〜』

泣き真似をする麗奈。

『バカなこと言わないの。とにかく、行く日を決めたら教えてよ。これから撮影のバイトがあるから行くね』

『今何時？』

智美は携帯の画面を見て、

『6時20分』

『マジでっ！？私もバイト遅れちゃう』

バタバタ片付けて、外に出た。

『じゃあね』

『バイバイ』

2人は左右に散って行った。

第2話

麗奈は自宅近くのコンビニでアルバイトをしている。仕事をテキパキこなし客受けもいいので、この店のアイドル的存在になっている。麗奈目当てに買い物に来る客も少なくない。この年で1人暮らしをしてる事情を察して、オーナーは麗奈を気にかけている。

仕事が終わわり、麗奈が奥の部屋にやって来た。

『お疲れ様でした』

『お疲れ様、はい、今月分の給料』

『ありがとうございます。あの…オーナー、相談があるんですけど…ん？』

帳簿をつけながら話を聞いている。

『2週間ほど、休ませて欲しいんですが…』
帳簿を書く手が止まった。

『2週間も？どうしたの？』

『あの…ある人に会いに行きたくて』

『ある人って彼？智美からある程度のことば聞いているけど』

この店は智美の兄がオーナーをやっている。そういう繋がりもあって、特別に中学を卒業してすぐにここで働いてる。

『はい、そうなんです』

『で、いつから行くの？』

『来週から行こうかと思うんですが…』

『…』

『ダメ…ですか？』

『麗奈ちゃんも今まで頑張ってきたし、行っておいで。その間は俺がシフトに入るよ』

兄は笑顔で答えた。

『無理言ってすいません』

『そんな、気にしないで。行くまでの一週間、よろしく願いしま

すね』

『はい、失礼します』

『お疲れさん』

麗奈は店を出て、自宅に帰って来た。

『お母さん、ただいま』

部屋の電気をつけて、仏壇の写真に手を合わせる。

『今日ね、智美にまーくんに会いに行くって話したよ』

麗奈は1日の出来事を、舞の霊前に話すことを日課としている。普通に親子が話すように。

『まーくんに奥さんや彼女がいなければいいんだけど…』

今日はいつもより手を合わせる時間が長い。

『きつと大丈夫よ…』

生きていれば、こんな言葉が返ってきたかもしれない。

麗奈の母、舞は麗奈が中1の時にこの世を去った。父親は生まれた時からいない。母1人子1人で育ってきた。

晩ご飯を済ませ、片付けをしていると智美が電話が来た。

『来週から行くって？兄貴から聞いたよ』

『うん、バイト休まなきゃいけないから、オーナーには早めに言っ
たほうがいいと思ってね』

『ほんと、麗奈は決断が早いよなあ』

『思い立ったが吉日って言うじゃん』

『そうなんだけどさ。2週間で戻って来ればいいけど』
『なんで？』

『そのまま彼んちに居着いたりして』

『そういうことになれば一番いいけどねえ…』

麗奈の声のトーンが落ちた。

『どうしたの？』

『だってさ、居着くってことは、まーくんが気に入ってくれるって
ことでしょ？子供っぽい私なんか相手にするかなって…』

『何言ってんだか』

『だって…いつも智美が私に言ってるじゃん』

『何をよ?』

智美と一緒にいることで、幼さがコンプレックスになってる麗奈。

『背ちっちゃいし、色気ないし、お子ちゃまだって』

智美は、日常何気なく口にしてる言葉が、麗奈を深く傷つけてることに気付いた。

『麗奈、そんなに気にしてたんだ。可愛さの裏側で言ってたつもりなんだけど…ごめんね』

『うん…』

『大丈夫よ。基本的に好きなタイプって変わらんだから。高校ん時のお母さんにそっくりなんだから、彼、麗奈にイチコロになるんじゃない?麗奈と私が並んで彼の前にいたら、きっと麗奈を選ぶよ。何を弱気になってんのよ。らしくないぞっ』

智美の励ましの言葉に、いつもの麗奈に戻った。

『ありがと。そうだよ。ポジティブになんないやね』

『そうだよ。頑張れっ』

『うん、頑張るよ』

電話を切った麗奈は、ある決断をして、風呂に入った。

第3話

麗奈の出発当日、智美は学校をサボり、麗奈の家に来ていた。

『どうしたの、その髪』

黒髪のロングヘアが自慢の麗奈の髪の毛が、バツサリ肩上で揃えられていて、赤みがかった茶色に染められていた。

『似合う?』

『うん。今までよりかなり子供っぽくなったけど、凄く可愛いよ』

『この写真を見て』

麗奈が舞の写真を見せた。

『これと同じ髪型にしたんだ。しかも色まで。でも思い切ったことしたねえ』

半ば呆れ気味に言った。

『これだけ似せたらまーくんを墜とせるんじゃないかって』

『ほんとに好きなのね。参りました』

『じゃあそろそろ私、行くね』

『東京駅まで送るよ』

『ほんと?』

『麗奈の旅立ちを見届けたいしね』

『ありがとう』

私鉄とJRを乗り継ぎ、東京駅に着いた。

麗奈は乗車券を、智美は入場券を買って、新幹線のホームに来た。

『あ、そうそう、これ、兄貴から麗奈へって』

智美が封筒を渡した。

中には現金と手紙が入っていた。

『少ないですが臨時ボーナスです。気をつけて行ってらっしゃい』

『智美、これ…』

『兄貴からの餞別だよ。店のことは気にしないでいいよって言うたよ。直接言えがいいのに。忙しさにかまけて…ねえ』

『ありがとう…ごめん、今はこれしか思いつかないよ』

麗奈は涙目になっている。

『何泣いてんのよ。ほら、さっさと乗らないとドア閉まっちゃうよ』
麗奈は新幹線に乗り込んだ。

『いい話ができるように頑張ってくるね』

『うん、何かあったら連絡してよ』

ドアが閉まった。

ゆっくり走り出し、2人はお互いが見えなくなるまで手を振っていた。

席に座り、雅夫の写真に話しかけた。

『もうすぐ…会えるね』

麗奈は、しばしの眠りについた。

数時間後、

『間もなく小倉に到着致します。ご乗車ありがとうございます…
乗り換えのお客様は…』

アナウンスで目覚めた麗奈は、出口のドアに向かった。

新幹線がホームに入り、停車してドアが開く。

『着いたあゝ。座りっ放しで疲れたよ』

改札を出て、駅の表に出た麗奈は深呼吸をした。地元、八王子とは違う街並にちよつとした期待と不安を抱きながら交番を探した。駅の左側に交番を見つけた麗奈は、メモを片手に入って行った。

『あのゝ、すいません。ここに行きたいんですが』

メモには、

大下雅夫

北九州市小倉南区…

と、書いてある。

『あそこからバスに乗って、池の下っていう所で降りたらずぐです』
『よ』

警官の丁寧な対応に、麗奈は礼を言った。

『ありがとうございます』

1時間弱バスに揺られ、目的地に着いた。

バス停から100メートルほど歩いた所にその場所があった。

ピンポン

『はい』

玄関の開き戸が開いた。

『あの、桜田といいます、雅夫さんいらっしゃいますか？』

『ごめんなさいね。雅夫は違う所で1人暮らししてるんですよ。ちよつと待つてくださいね』

雅夫の母が住所を書いたメモを渡した。

『ここからバスと電車乗り継いで2時間くらいはかかりますよ。行き方わかります？』

『いえ、こちらに来たのは初めてなんで』

『バスで駅まで行って、電車で博多駅まで行ってください。駅からは歩いて15分位です』

『そうですか、ご丁寧にありがとうございます』

『わざわざ来てもらったのに、悪かったわね』

『いえいえ、失礼します』

麗奈は雅夫の家へ向かった。

『あの人、どこかで見たような…』

母は、そう思いつつも気にもしなかった。

『ふっつ、疲れた。早く帰ろう』

車を走らせ、雅夫は家路を急いだ。

『あのバカ部長、こき使いすぎだよ』

雅夫は中堅企業の電算室長で、いつも仕事を丸投げする事業部長に呆れ果てていた。

連日にわたる深夜残業で、疲れが溜まりに溜まっていた。

『ま、家に帰ったところで待つ人はいないし…』

36歳になる雅夫は、それなりの付き合いをしてきた。が、本気で恋愛ができないでいた。

『急がないと、店が閉まってしまう』

入社以来、行きつけの食堂の閉店時間が迫ってきてる。

雅夫のアクセルを踏む足に力が入る

『！！』

正面に麗奈が飛び出してきた。

雅夫は急ブレーキをかけた。

『バカヤロー！危ねえだろっ！気をつけろっ』

ドア越しに雅夫が叫んだ。

『すいません』

顔を上げた瞬間、

『…舞ちゃん？』

『すいません、本当にごめんなさい』

麗奈は走り去って行った。

『おーい、君いー！』

雅夫は18年前に別れた舞のことが忘れられずにいた。

『あー、ビックリした。やっぱり暗いと家がわかんないよ。明日探そう』

麗奈はネットカフェに行って一夜を明かすことにした。

舞らしき姿を見て、呆然としてる間に、食堂の営業時間はとうに過ぎてしまっている。

『弁当でも買って帰ろう』

コンビニに寄って、雅夫は自宅に戻った。

第4話

雅夫は高校の時、吹奏楽部でトランペットを吹いていた。高校1年の秋に、転校生が入部してきた。

『桜田 舞です。前の学校ではクラリネットをやってました。宜しくお願いします』

『可愛いじゃん』

サックスの健四郎が雅夫に言った。

『うん、でも年上だし』

『年下は興味ないかな？』

『でも、ほんと可愛いよ。この学校の中でもピカイチだよ』
帰りの方向が同じだったので、いつしか舞は雅夫達と帰るようになった。

『舞ちゃんは彼氏いるの？』

『うん、前の学校にいるよ。遠距離になっちゃった』

『…だろうなあ。そりゃあ、こんなにかわいいんだから彼氏もいるわな…そもそも年下の男なんて興味ないだろうし…』

雅夫は無意識のうちに舞に恋心を抱いていた。

『大下、何ブルー入ってんの？』

先輩の1人が雅夫の頭を叩いた。

『何にもないっすよ』

『あゝ、もしかして舞ちゃんにホの字なのお？』

『だめよ、ちゃゝんと彼氏いるんだから』

『わかってますよ！』

『大下はね、手が早いから気をつけてね』

『先輩、何てことを言っんですか？』

舞は雅夫を見て微笑んだ。

次の年のバレンタインデー、雅夫は同学年の女子部員に呼び出された。

『何だよ』

『いいから、ついてきてっ!』

屋上に通じる階段の踊り場に舞がいた。

『先輩、連れてきましたよ。私はこれで失礼します』

『ありがとうね』

お互いうつ向いたまま、沈黙が続く。

『あ、あのー』

先に声を発したのは舞だった。

『はい』

『これ…』

ピンク色の包みを雅夫に渡した。

『あ、ありがとうございます』

『私は用事があるから、先に帰るね』

『はい、お疲れ様でした』

雅夫は包み紙に挟まれてた手紙を読んだ。

「好きです」

一言だけのメッセージに雅夫は驚いた。憧れの舞に告白され、夢じやないかと何度も読み返した。

『夢じゃない…』

帰宅後、雅夫も舞に手紙を書いた

「僕も好きです」

翌朝、舞の下駄箱に手紙を入れた。先輩達の計らいで、この日から帰りは2人で帰るようになった。

『桜田先輩…』

『あのさ、部活の時は仕方ないけど、2人でいる時は先輩はやめようよ。私は…まーくんって呼ぶね』

『オレは……舞ちゃん……でいい?』

『いいよ、まーくん』

『わかった。舞ちゃん』

雅夫にとつて最初の恋愛が始まった。

『舞ちゃん、一つ聞いていい?』

『なに?』

『舞ちゃんって前の学校に彼氏いるんだよね』

『いないよ』

『だって、前に先輩達と話してたじゃん』

『ああ、あれは嘘。ああでも言わないと、清美が彼氏紹介するってうるさいんだもん』

『清美先輩のおせっかいは有名だからね』

『まーくんは彼女紹介するって言われたことないの?』

『うん、あまり気に入られてないみたいだから』

『手が早いつて言ってたしね』

舞が笑つて言う。

『そんなことないよ……てか、紹介されて付き合うのって嫌だし』
自らを弁護するのに必死な雅夫を見て、舞がまた笑った。

『私もそう思うよ。自分の好きな人は自分で見つけないとね』

舞は雅夫の手を握った。

『手つないでいい?』

雅夫の右手は今までになく熱くなっていた。

『舞ちゃん』

『ん?』

『清美先輩が言ってたこと……真に受けてる?』

『えっ、手が早いつてこと?今まではそうだったかもしれないけど、私はまーくんが大好きだから……そんなことはどうでもいいのっ。ずくつと信じてるから』

『……………』

雅夫が黙りこんだ。

『私、悪いこと言ったかなあ?』

『ううん、今までそんなこと言われたことなかったから…オレ、舞ちゃんをずっつと大事にする。約束するよ』

『ずっつと?』

『うん!』

『信じていいの?』

『もちろんっ!』

『うれしいっ』

舞は雅夫に寄り添った。

第5話

翌日、麗奈は改めて雅夫の家を探した。

『あつ、あつた。ここだ。なァーんだ、昨日車にひかれそうになった所の近くじゃん』

昨夜、車越しから怒鳴ったのが、雅夫とは思ってもよらない。麗奈は部屋のインターホンのボタンを押した。
ピンポン…

………

中から反応がない。

『仕事に行ってるのかなァ』

麗奈は途方に暮れた。

『どうしよう…電話番号も聞いとけばよかったなァ。勇気を出してここまで来たんだもん。諦めちゃダメだよ、麗奈！』

麗奈の携帯が鳴った。智美からだ。

『どう？会えた？』

『家は見つかつたけど、留守みたい』

『普通なら会社に行ってる時間だもんね』

『うん。夜にでも来てみるよ』

『あんまり大荷物持ってウロウロしていると、家出少女に間違われるからね』

真意を突かれて、麗奈はドキッとした。

『わ、わかってるわよっ！』

『寝場所とかちゃんとしてるの？』

『昨日はネットカフェに泊まったよ』

『まったくもう、そんなことだと思つたよ』

『だってえ、すぐ会えるって思ってたし…』

『美幸姉ちゃんがそっちにいるから行ってみたら？』

智美の母の妹、美幸は智美と麗奈を自分の妹のように可愛がってい

る。

『そんなあ、なんか悪くない?』

『この先、ずっとネットカフェで寝泊まりするって訳いかないでしょ? 彼に会えたからって、そのまま泊まれるとは限らないんだよ』

『そうなんだけど...』

『あとで住所と電話番号をメールで送るから。気兼ねするようない人じゃないってことは麗奈もわかってると思うし。私からも美幸姉ちゃんには麗奈のこと話しておくから』

『うん...』

『ちゃんと会えるまで心配だけど、頑張ってね』

『智美ってお姉ちゃんみたい』

『デキの悪い妹を持つと苦労するよ』

『どうせデキが悪いですよーだ』

『じゃあね』

『うん、あつ、智美』

『何?』

『...ありがとうね』

『絶対に会えるから、ねっ』

『うんっ』

電話を切った。しばらくすると、智美から美幸の住所と電話番号を書いたメールが来た。

福岡市早良区...

090 - **** - ****

早速麗奈は電話を試みた。

『もしもし』

『あの、麗奈ですが...』

『麗奈!? 久しぶり。元気してる?』

『はい』

『智美から電話があったよ。福岡に来てるんだって？今、どこにいるの？』

『博多駅の近くなんだけど』

『じゃあ、迎えに行くから。1時間後に駅で』

『えっ？』

『家出少女がそっちに行つたからよろしくって、智美が言ってたよ』

『ははっ…』

『駅に着いたら電話するね』

『はい』

1時間ほどして、美幸から電話がきた。

『駅を出て、右側にあるコンビニの前に止まってる赤い車が私よ』

麗奈は駆けて行った。

『こんにちは』

『まあ、すっかりかわいくなつて。中学入学以来かしら』

車に荷物を積んで、美幸の家に向かった。

『学校サボってどうして福岡に来たの？』

『運命の人に会いにきたの』

『運命！？』

『まーくん』

『ああ、麗奈のお母さんの彼だった人ね。なんでその人が運命の人なの？』

『自分でもよくわかんないんだけど…まーくんがこれからの私の人生を変えてくれそうなのがして』

『へえー、麗奈の直感？』

『うん、直感というか…思い込みかも』

『そういう気持ちは大事だよ』

市街地を抜け、海にほど近いマンションに着いた。

第6話

『ここが美幸姉ちゃんのマンション？』

『そう。ここの12階に私の部屋があるの』

荷物を持って、エレベーターに乗った。

『どうぞ』

美幸が扉を開けた。

『お邪魔しまーす』

モノトーンで統一された部屋は、麗奈には格好よく、新鮮に見えた。

『わぁー、海だ』

ベランダからは海が一望できる。

『ここから海を見てると、嫌なことも忘れちゃうよ』

『だよなー。海を見ながら生活するのって憧れるなあ』

『だったら麗奈も福岡で暮らせば？』

『そうだなあ』

美幸は使っていない奥の部屋に麗奈を案内した。

『ここは今日から麗奈の部屋ね。自分の部屋みたいに自由に使ってね』

『はーい』

麗奈はカバンから服を出し、しわにならないように広げている。

『コーヒー、お茶、ジュース、何飲む？』

『お茶がいいな』

美幸がお茶と菓子をテーブルに置いた。

『お茶入ったよ』

『はーい』

麗奈がリビングに来た。

『いただきまーす』

2人してお茶をすする。

『ねえねえ、そのまーくんってどんな人なの？』

『お母さんの話と私の想像しかないんだけど、凄くいい人だよ』

『そうだよ。現実会ってないんだもんね』

『写真、見る？』

『彼の？』

『うん、お母さんと一緒だから、かなり昔の写真だけど』

『見せて見せて』

麗奈は美幸に写真を渡した。

美幸は驚いた。

『大下…君？』

『美幸姉ちゃん、知ってんの？』

『知ってるも何も…元力だよ』

『まーくと付き合ってたの？』

麗奈の目が丸くなる。

『大下君の会社に派遣で行ってた時に、意気投合して付き合うようになったんだけどね』

『それでそれで？』

麗奈は興味津々だ。

『いつも陰がある感じで、そこが魅力的だったんだけど、いつまで経っても手すら握らないの』

『何で？付き合ってたんでしょ？』

『私のこと、嫌いなのか？って聞いてみたの』

『何て言ったの？』

『昔からずっと想ってる人がいて…その人に自分なりのケジメをつけないと…みんなに迷惑をかけてしまう…って』

『そうなんだ』

『始めは、何なのこいつって思ったけど、真面目な恋愛しか出来ない人なんだって思うと憎めなくなってるね』

麗奈は舞のことだと直感した。

『まーくんとはその後どうなったの？』

『結局別れたわ。それ以来、全然連絡とってないよ』

『そっかあ』

『高校の時の写真なのに、全然変わってないね』

『そうなの？』

『うん、眼鏡からコンタクトに変わったくらいかな？』

『よかった…』

麗奈はひとまず安心した。デブでもハゲでもなかったことに。

『麗奈のお母さんが亡くなって、何年になるかねえ？』

『中1の時だったから、4年になるよ』

『康夫じいちゃんは元気？』

『一昨年死んじゃった』

『えっ！？じゃあ今は1人なの？』

『うん』

『そっかあ、大変だね』

『だいぶ馴れたよ。初めは心細かったけどね。智美に何度も助けられたよ』

『私、これから仕事なんだけど、麗奈はどうする？家にいる？』

『まーくんの所に行ってみるよ。夜なら会えるかもしれないし』

美幸は地元のラジオ局でDJをやっている。

『10時に終わるから。なるべく早く帰るね』

美幸は麗奈に合い鍵を渡した。

『うん、わかった』

『駅まで送っていくわ』

『ありがとう。仕事は車で行ってんの？』

『そうよ。打ち合わせとかで遅くなると、足が無くなるからね』

部屋を出て、車に乗り込んだ。

『美幸姉ちゃんのラジオ、聞いてみたいな』

『FMで8時からやってるから、聞けたら聞いてみて』

『うん』

駅に着いた。

『じゃあね』

『仕事、頑張つてね』

美幸の車を見送って、再び雅夫のアパートに向かった。

第7話

『で、何でお前は結婚しないの？いい年してさ』
高校からの悪友で、同じ会社に入った健四郎と、酒を呑みながら話をしている。

『なんでって…別に理由はないけど…』

『家に帰っても味気ないんじゃないの？』

『けっこう気楽だよ。これでも』

『強がり言っちゃって』

雅夫と健四郎は焼酎のおかわりを注文した。

『あ、そういえば、昨日、舞ちゃんとそっくりな子を見た』

『舞ちゃんって、あの？』

『うん、うり二つ…っていうか、まんま舞ちゃんだった。幽霊かと思っくらい』

『幽霊じゃないの？うらめしや〜って』

健四郎が真似をする。

『今は10月よ。いくらなんでも季節外れでしょ。幽霊ってことは舞ちゃんが死んでるってこと？おいおい、縁起でもないこと言っなよ。てか、オレって恨まれるようなことしたっけ？』

『ほら、パチーンって』

『叩いたことかあ…』

雅夫は深い溜め息をついた。

『でなけりや、タイムマシンで来たんじゃないの？』

『そんなものがあるなら、オレがあ顷に戻って謝りたいよ』

『やつぱり舞ちゃんのこと引きずってるし。だから結婚しないんだあれから何年よ？いくらなんでも、引きずり過ぎじゃないの？』

『別に時間は関係ないじゃん。この先も舞ちゃんを超える人は出てこないだろうな』

雅夫は煙草に火を付けた。

『こりや重症だ。ま、いずれは適当なところで妥協するんだろっけど、寂しさに負けてね』

『舞ちゃんの想い出だけで生きていけるからいいのっ』

『今、舞ちゃんってどこにいるんだろ?』

『さあ、東京で就職したって噂は聞いたけど…』

『探しに行けば?』

『気安く言っなよ。行くって東京だぜ。しかも噂だけで、何の根拠もないのにどこ捜すんだよ』

『東京には三沢がいるよ』

健四郎があっさり言った。

『三沢って、ホルン吹いてたりっちゃんのこと?』

『うん、こっちの専門学校出て、東京で就職してるよ』

『何で知ってんの?』

『俺達付き合ってたの、知らなかったっけ?』

『いつだよ。初めて聞いた』

『卒業前から…何ヶ月も保たなかったけどね』

『ふ〜ん。あれから10何年も経ってるのに、東京にいるってよくわかるなあ』

『メールのやりとりはやってるからね』

『お前、妻帯者の身で何やってんだよ!』

『バカ、誤解すんな。ウチのカミさんも一緒にメールやってんだよ。それはともかく、有給は山ほど残ってるんだし…第一、舞ちゃんに謝るんじやなかったっけ?』

『うん。確かに。探してみるか』

『三沢には俺の方から連絡してみるよ』

『ああ、頼むよ。それと、有給の手続き、よろしく。総務課長さん
っ』

『14日でいいね』

『ちよっと待って』

雅夫は携帯で航空券の予約を取った。

『お前はこういう時の行動だけは早いよな』
『‘だけ’は余計だよ…これでOK』
『では、舞ちゃんの再開を祈って乾杯！』
『乾杯っ！』

第8話

その頃、雅夫の部屋の玄関前で麗奈が座り込んでいた。

『いつもこんなに遅いのかなあ』

時計は10時を過ぎている。

『朝に來ると迷惑だろうし…どうしよう』

雅夫の隣の住人が帰ってきた。

『すいません、大下さんはいつも帰りが遅いんですか？』

『ここ何日かは見かけないですよ。会社に寝泊まりしてるのかも』

『そうですか…』

麗奈は建物から出て美幸に電話をした。

『美幸姉ちゃん…』

『もしかして、会えなかった？』

『うん』

『今から局を出るから、駅で待つてて』

『はい』

麗奈が駅に着いて20分ほどして、美幸がやって来た。

『お待たせ』

『今日も会えなかったよ』

『全く、ヤツは何やってるんだか…』

『仕方ないよ。会社に寝泊まりしてるんじゃないかって、隣の人言
つてたし』

『相変わらず忙しい人なんだ』

『お仕事大変なんだなあ』

『会社のコンピューターを1人で切り盛りしてるからね』

『へえ、すごい』

『明日、大下君の会社に電話してみよっか？』

『えっ！？』

『待つてたつていつ会えるかわかんないし、連絡さえつけばなんと』

かなるでしょ?」

「うん、ありがとう」

「今日は遅いから、ホ力弁買って帰ろうか?」

「私唐揚げ弁当!」

「はいはい」

2人は近くの弁当屋に行った。

入れ違いで自宅に帰って来た雅夫に健四郎から電話が来た。

「三沢と連絡とれたよ」

「どうだった?」

「情報は古いけど、舞ちゃんの住所がわかったよ」

「マジで!?!」

「詳しいことは俺も聞いてないんだけど」

「何だよ、それ」

「三沢にお前の番号教えといたから、連絡くると思うよ」

「わかった、サンキュ」

健四郎からの電話を切った瞬間、着信が入った。

「もしもし」

「三沢です」

「久しぶりだね。元気?」

「元気だよ。先輩、舞ちゃん先輩を探しに東京に来るんだって?」
「いつしかタメ口になってる。」

「うん、会えるかどうかかわかないけど」

「何で今更…舞ちゃん先輩を?」

「電話じゃ長くなるから、明日行ってから話すよ」

「明日!?!急だなあ」

「急って言われても…」

「先輩、泊まる所は手配してるの?」

「ううん、まだだよ。行ったらなんとかかなるでしょ」

「だったら私の働いてるホテルに泊まれば?安くしとくよ」

律子は都内でホテルマンとして働いてる。

『それは有り難い。宜しく頼むよ』

『でさ、明日は何時に来るの？』

『羽田に10時20分に着くよ』

『飛行機だね。そしたら、羽田からモノレールに乗って浜松町で乗り換えて、新宿まできたらこの番号に電話してね』

『わかった。お世話になります』

『お世話してやろう。エヘッ』

『調子乗りやがって』

『じゃあ、明日、お待ちしております』

『じゃあね』

雅夫は期待と不安が折り重なった中で眠りについた。

翌日、定刻通りに羽田に到着した雅夫は、モノレールとJRに乗り継ぎ、新宿駅に降りた。

『さすが東京。人が多いなあ』

平日の昼間とはいえ、駅は混み合っている。

半ば人酔いした雅夫は、律子に電話した。

『今、新宿駅のどこにいます？』

『えーっと、目の前に京王線の改札があるよ』

『そこで待つて。すぐに行くから』

しばらくして、ホテルの制服を着た律子がやって来た。

『よっ、ホテルウーマン』

『先輩、全然変わってないね』

『りっちゃんも昔のまんま』

『すっかりおばちゃんだよ』

『こっちもおじちゃんだよ。とりあえず、荷物を置いて落ち着きたいよ。人が多すぎて具合が悪くなるよ』

『私もこっちに着た頃は通勤が嫌だったわあ。さすがにもう慣れたけどね』

雅夫と律子はホテルに着いてチェックインを済ませた。

『先輩、まだ掃除中で部屋に入れないんだ。荷物、フロントで預か

つてくよ。貴重品だけ出しといてね』

『貴重品はこれだけだから』

ポケットの中から財布と携帯を出した。

『隣の喫茶室でコーヒーでも飲んで、後で行くから』
雅夫は喫茶室に移動した。

「舞ちゃんもこの大都会で生活してたんだなあ」

煙草をふかし、コーヒーを飲みながら、物思いにふけっていると、私服に着替えた律子がやって来た。

『今日は早退してきたよ。場所変えて、話を聞かせて』
2人はホテルを出て、近くの喫茶店に場所をかえた。

第9話

一方、美幸は雅夫の会社に電話をしていた。

『はい。ヤマト商事でございます』

『電算室の山下さんをお願いします』

『失礼ですが、お名前は』

『山中と言います』

『お待ち下さい』

しばらく待たされて、

『お待ちせしました。山下は休暇を取ってますが』

『そうですか…じゃあ、総務の西山さんお願いします』

『しばらくお待ちください』

さつきよりは待ち時間は少なかった。

『はい、西山です』

『お久しぶりです。山中美幸です』

『…美幸ちゃん？。久しぶり、元気？ラジオ聞けるよ』

『聞いてくれるんだ。ありがとう。こっちは元気過ぎて困ってるよ』

『今日はどうしたの？ウチでバイトでもする？空きあるよ』

『降板したらお願いするかも。山下君、休暇取ってるんだって？』

『ああ、今日から2週間ね。東京に行ったよ』

『観光？』

『いや、例の高校から引きずってる彼女に会いに行くって。この話知ってた…よね？』

雅夫は舞がこの世にいないことを知らない。

『そ、そうなんだ』

『携帯はあの頃と同じだから電話したら通じるよ。番号わかる？』

『わかるよ。ありがとう』

『今度飲み行こうよ』

『そうね。スケジュールが合えばみんなで行こうね』

『じゃあね』

『はい』

タイミングの悪さに、美幸は溜め息をついた。

『どうだった？』

『麗奈あ、大下君は東京に行ったって。お母さんを捜しに』

『えーっ、うそ。お母さん死んじゃってるのにどうやって捜すのよ。私、東京に帰るっ』

『麗奈が帰ったら、またすれ違いになるよ』

『…だよ』

美幸は雅夫の携帯に電話をかけた。

…お客様のかけになった電話は電波の届かない…

『あのバカ、つながんないし…麗奈、私が責任持って大下君に会わせるから待っててね』

『うん、ありがと』

時同じくして、東京の雅夫は律子に今までの経緯を話していた。

『舞ちゃん先輩とそっくりの女の子か…先輩はそれが気になるんだ』

『りっちゃんも見たら絶対びっくりするって。ほとんど同一人物…ていうか。きちんと謝らなければいけないことがあってさ』

『何を？』

『…叩いたこと』

『だって、あれは舞ちゃん先輩が悪いんだから叩かれて当然だよ』

『りっちゃんだけだったね。オレの肩を持ってくれたのは』

…

舞が卒業する間近の2月、雅夫は呼び出された。

『まーくん…』

『どうしたの？』

いつになく、舞の表情が曇ってる。

『私、好きな人ができたの…』

『マジ？誰？』

『他の学校の人なんだけど、車持ってるの』

『車…？』

『だって、まーくんは車持ってるじゃないじゃん』

『そんな事言われたって、18になってないし』

『私は車の助手席に乗りたいのっ』

『18になったらすぐ免許とるからさ、それまで待つててよ』

『そんなに待てないよ。それに私、その人とエッチもしちゃったんだよっ』

雅夫は頭が真っ白になっていた。訳の分からない間に、パシッ

雅夫の右手は舞の頬を叩いていた。

『帰れよ。顔も見たくない』

舞は何も言わずに帰って行った。

……

『結果だけ見れば、確かに舞ちゃんが悪いんだけどね』

『どういうこと？』

『お母さんに別れるように言われたらしい』

『どうして？』

『別れた後で唯姉ちゃんから聞いたんだけど、親の職業が違いすぎて住む世界が違うから別れなさいって。舞ちゃんは相当悩んだ末の行動だったんだよ』

『そんなのあり！？』

『オレを傷つけまいとして、自分を悪者に仕立て上げた…車持ちの彼は存在しなかったってわけ』

『そうだったんだ…私、先輩達は絶対結婚するって思ってたのに』

『お互いそのつもりだったよ。お母さんがそれを察して、このままじゃマズいって思ったんじゃないかな』

『お母さんって古臭い考えをしてたんだね』

『で、舞ちゃんはどこにいるの?』

『私が上京した時に、渋谷で偶然に会ったの。その時に住所を交換したんだけど。これがその時のメモ』

舞が書いた文字で住所と電話番号が書かれてる

『電話は?』

『使われておりません…だつて』

『この住所の調布って所までどれくらいかかるの?』

『特急で30分くらいかな』

『今から行こう』

雅夫と律子は調布に向かった。

第10話

『この住所だと駅の近くだね』

『今も住んでたらラッキーだけど…』

『15年以上も前の話だし、ビミョーだよ』

『住んでないとしても、何か手がかりが見つかるかもしれないし』

『そうだね』

電車が揺れて、律子は雅夫に寄りかかった。

『大丈夫？』

『うん』

しばらく経っても、律子は雅夫にくっついていてる。

『あのー、もう揺れてないんですけど』

『えっ、あつ、ごめん』

雅夫から離れた。律子は高校で雅夫に出会った時から、仄かに恋心を抱いていた。当時は舞と付き合っていたから、打ち明けられずには過ぎて行つた。舞と別れた後も、遠からず近からずの距離を保つて接していた。律子は未だに雅夫のことを好きでいる。もし、付き合つて別れてしまつて、雅夫を失うことを考えると友達のリインを維持していくのがいいと、いつの頃からか思うようになっていた。『先輩がずっと独身なのは、今でも舞ちゃん先輩を愛してるからなんですよ』

『えっ！？』

『健四郎先輩から聞いちゃった』

『あのバカ、余計なことを…』

『でも、そうに想われてるって舞ちゃん先輩も幸せ者だなあ』

『ただただ不器用なだけだよ。それに、一歩間違えたら立派なスト

ーカーだよ』

電車は調布駅に着いた。

『確か…この辺だと…』

舞からのメモ書きの住所は駐車場になっていた。

『あの…すいません』

雅夫は駐車場にいた50代位の男性に声をかけた。

『以前、ここにアパートが建ってませんでしたか？』

『建ってたよ。10年前に取り壊して駐車場にしたんだよ』

『この大家さんはどこにおられますか？』

『あの家だよ』

駐車場の裏手にある一軒家を指差した。

『ありがとうございます』

2人は大家を訪ねた。

『ごめんください』

『はい』

品のいい、初老の女性が出て来た。

『あの、以前に表の駐車場に建ってたアパートに住んでいた人のことでお伺いしたいんですが』

『はあ』

『18年ほど前に桜田舞って人が住んでたと思うんですが』

『桜田…ああ、確か福岡から上京してきたお嬢さんね』

『はい、そうです。彼女の行方を探してるんですが』

『桜田さんなら結婚すると言って引越して行きましたよ。もうかれこれ16年くらいになるかしら』

『そうなんですか。それで、どこに引越したかわかりますか？』

『えーっと、確か…日野の…高幡不動の駅前のマンションって言うてたような…なにしろ、かなり前の話ですからね、記憶が定かではありませんが…』

『結婚後の名字はわかりますか？』

『後小路って言うてたわ。珍しい名前だったから、これだけはしっかり覚えてるわ』

『ありがとうございます。助かりました』

2人は駅に向かって歩いてる。

『りっちゃん、高幡不動って遠いの?』

『20分くらいかな?』

雅夫は携帯を見て、時間を見ようとしたが、電源が切れている。

『そっか、飛行機乗る時に電源切ってたんだ』

電源を入れ、メールチェックをしようとしてる雅夫に、

『何やってんの?』

律子が雅夫の携帯を覗きこんだ。

『先輩の待ち受け、舞ちゃん先輩なんだ』

『うん、高校ん時のやつなんだけどね』

『へえ、もうほとんどビョーキだね』

『うるせーっ』

『行くんでしょ?高幡』

2人は電車に乗って高幡不動に向かった。

高幡不動駅に着いた2人はマンションを探した。

『駅前のマンションって言うけど、こんなにたくさんあるの?』

『最近急に建ちだしたよ』

雅夫は築20年くらいは経ったであろうマンションに目を付けた。

『多分あそこだね。郵便受けから号数がわかるかもしれない』

名字を頼りに一つずつ見ていった。

『先輩、あったよ!』

『705号室か。行ってみよう』

エレベーターで7階に上がり、部屋の前に来た。

『ピンポン』

小太りの男性がドアを開けた。

『突然すみません。舞さんはおられますか?』

『舞?』

『旧姓桜田、桜田舞さんなんですが』

『お宅らは?』

『舞さんの高校時代の友達なんです、調布のアパートに行ったら、こちらに嫁いだと聞いたもので』

『あ…そうですね。あの、駅前の「道」という喫茶店があるので、
そこで待っていてください。すぐ行きますので』
『わかりました』

2人は喫茶店に行った。

第11話

『舞ちゃん先輩、いないのかなあ』

律子が雅夫に話しかけた。

『うん、いればあの場に出てくるはずだもん…』

30分くらいして、後小路が現れた。

『あ、すみません』

『こちらこそ、突然お邪魔しちゃって』

『舞のことなんです…実は私達、結婚はしてないんです』

『どういうことですか？』

『舞が妊娠して、結婚するつもりで、全て用意を済ませてたんです。式の前日になって、彼女が一方的に断ってきまして。養育費も慰謝料も認知もいらない。自分1人で育てると言って、姿を消して…それ以来どこで何をしてるか…』

『そうですか…てことは、入籍もまだ？』

『はい。式を終えて入籍するつもりでしたから。親兄弟、親戚からは一族の笑い者だと批難され、今も絶縁状態なんですよ』

『……』

返事に困る雅夫と律子。

『ま、今では笑い話ですけどね。もしかして、舞と同じ吹奏楽部の方ですか？』

『はい』

『いつも話をしてましたよ。あの頃に戻りたいって口癖のように言っていました』

後小路は懐かしんで話していた。

『そうなんです…わかりました。どうもありがとうございました。あの、後小路さん、余計な事かもしれませんが、ご両親にはきちんと話されたほうがいいと思います。本心で批難されてる訳じゃないと思いますから』

『ええ…そうですね。今度、話しに行ってみます。今日はすいません、せつかく来て戴いたのにお役にたてなくて。あつ、あの…』
『はい』

『もし、舞に会ったら、こっちは元気でやってるから気にするなつて伝えてください』

雅夫と律子は、後小路に会釈をして店を出た。

『先輩、舞ちゃん先輩はシングルマザーで頑張ってたんだね』

『そうだな、何も苦勞を買って出ることないのに…』

『あの後小路って人、体型こそ違うけど先輩に似てるような感じがしたよ』

『オレって、あんな感じなの？』

『うん、優しさがにじみ出てるっていうか…舞ちゃん先輩は先輩に似てる人を探して、子供を産みたかつたんじゃないかな』

『女性って子供を産む時ってそうに考えるの？』

『私はそう思うよ。好きな人が近くにいないなら、似た人を探して子供を産めば、その人のことを想いながら育てられるじゃん』

『じゃんって言われても…もし、りっちゃんが同じ立場なら舞ちゃんと同じことする？』

『私にはできないな。女手一人で子供を育てるって並大抵のことじゃないもん。舞ちゃん先輩はかなりの覚悟をして決断したんだよ』

雅夫は、もつと早く舞を探せばよかったと後悔した。たとえ、自分と舞との子供でなくても、一緒に暮らしていければお互いが幸せだったのにと。

『そういえば先輩、コンタクトに変えたんだ』

『まあね、イメチェンだよ』

2人は電車に乗って、新宿に戻った。

『先輩、これからどうするの？』

『明日、向こうに帰るよ』

『じゃあ、今晚は久々に飲みに行く？』

『そうしますか』

ホテル近くのこじやれた居酒屋に行った。

『カンパイ』

『りっちゃんって結婚してたよね』

『離婚したよ』

『いつ？』

『結婚してから2年で終わったの』

『ごめん。変なこと聞いてしまつて』

『うっん、都会の男は私に合わなかっただけ』

『地元に戻ってくればいいのに』

『男は合わないけど、土地と仕事は合ってるから当分はこっちに
るわ』

『制服姿のりっちゃん、格好良かったよ』

『そう？惚れた？』

『惚れたって誰が誰に？』

『そうよね。先輩の頭の中は、舞ちゃん先輩で一杯だもんね』

『それは昔も今も変わらないよ』

『鈍感っ』

律子是小声で吐き捨てるように言った。

『ん？何か言つた？』

『うっん、独り言。ところでさ、唯姉ちゃんが言つてた住んでる世
界が違うってどういうこと？』

『舞ちゃんちって、お父さんが証券会社の重役で、それに比べウチ
はダンプの運ちゃん。住む世界が違うって言われたら何も言えない
よ』

『そんなことを言うお母さんには見えなかったよ』

『うん、お母さんにはよくしてもらつただけにシヨックだった』

『辛いね』

『そういえば、唯姉ちゃんってどこにいるのかなあ』

『あれ、先輩知らないの？うちらがいた高校で先生やってるよ。し
かもブラバンの顧問も』

『そうなの？全然知らなかった。学校に行けば会えるんだ』

『まさに灯台元暗しだね』

『言えてる。そうそう、りっちゃんと健四郎って付き合ってたの？』

『付き合ってたってほどのもんじゃないよ。3ヶ月も続かなかったし』

『りっちゃんってそういう趣味だったんだ』

『健四郎先輩が余りにもしつこいから、ボランティアみたいなものだよ。あつ、言っとくけど、キスも何もしてないからね』

『聞いちゃあいねえよ』

『今はあの夫婦とメル友だし。私がほんとに好きだったのは…』

『誰？』

『さあて、明日も仕事だし、そろそろ帰ろっか？』

『誰なんだよ』

『ご馳走さまでした』

『おーいっ』

律子はそそくさと店を出ていった。

第12話

会計を済ませ、表に出た時、電話が鳴った。美幸からだ。

『もしもし』

『久しぶり、覚えてる?』

『ああ、すっかりとね』

『東京に行ってるんだって?西山さんに聞いたよ』

『ちよつと野暮用で。どうしたの?』

『いつ戻ってくるの?』

『明日帰るよ』

『ねえ。デートしない?』

『は?』

『は?って何よ。彼女でもできたわけ?』

『いるわけないでしょ。別にいいけど、どういう風の吹き回し?』

『私が誘っちゃいけないわけ?どうせ暇なんだし』

『決めつけるなよ』

『明後日の午後2時に鶴見岳の頂上で待ってるね』

雅夫は一瞬考えた。

『鶴見岳って別府の?』

『他にないでしょ』

デートに誘っておきながら、何故か冷たい美幸の対応。

『なんか怪しいなあ』

『じゃあね』

『ああ』

電話を切っても、イマイチ納得いかない様子の雅夫に、

『先輩、どうしたの?』

律子が聞く。

『いや、何でもない。大丈夫』

『今日はありがとうね』

『いえいえ、久しぶりだったし、楽しかったよ』

『じゃあ、帰るね』

『うん、気をつけてね』

『おやすみなさい』

『おやすみ』

雅夫はホテルに戻り、律子は自宅に帰っていった。

『よし、準備OK。麗奈、明後日には会えるよ。運命の人に』

『ありがとう。その、鶴…なんとかって何？』

『鶴見岳ね。麗奈、写真もう一度見せて』

定期入れから写真を取り出した。

『大下君と麗奈のお母さんが写真を撮った場所、ほら』

美幸が指差した所に鶴見岳の石碑が建っている。

『ここで麗奈と大下君が会えばいいかなあって思ってたね』

『まーくんとお母さんとの思い出の場所で会うのかあ…』

『有給まで取って、お母さんに会いに東京行くななんてどうしたんだろっ？』

『まーくんって休みとらない人なの？』

『前に聞いたことがあるんだけど、有給が溜まりすぎて会社と喧嘩したことがあるんだって。自分の置かれてる立場じゃ、休みたくても休めないってのが正直なところみたいだけどね』

『ふーん』

『何かを予感したのかも』

『お母さんのこと？』

『多分ね。大下君ってそういう所は妙に感が鋭いっていうか…ずっと思い続けてる人のことだから、当然っていやあ当然だね』

『そこまでお母さんのことを…私、自信無くなっちゃったなあ』

麗奈の顔が曇ってきた。

『大丈夫よ。お母さんがいなくなった今、大下君の凍りついた心を溶かすのは麗奈しかないんだから』

美幸が麗奈の手を握った。

『うん、ありがとう』

その時、

ピンポン

『はい』

インターホンの画面に映ったのは智美だった。

『あんた、どうしたのよ』

『話はあとあと。早く開けてよ』

美幸が入口の自動ドアを開け、しばらくして美幸の部屋の玄関が開いた

『智美い！』

『麗奈、私も来ちゃった』

『来ちゃったってあんた…』

『モデルの口ケでこっちに來たの。あつ私、読者モデルから専属に変わったから』

『うそ〜っ、おめでとう』

麗奈は久々の智美との再開に瞳を輝かせてる。一方、美幸は不安と呆れが半々といった顔をしている。

『学校はどうすんのよ。第一、お姉ちゃん達は何て言ってるの？』

『今回は特別。卒業するまでは、学業に支障のないようにしてくれらるって。だから親もOKだよ』

『ならいいけど。留年しないように、ちゃんと勉強するのよ』

『はいはい。美幸姉ちゃん、うちの両親より厳しいんだもんなあ』

『愛のムチよ。智美と麗奈は私のかわいい妹だからね』

『麗奈、ところで進展あったの？』

麗奈は智美に今までのいきさつを話した。

『美幸姉ちゃんの元カレが麗奈のお母さんの元カレで…へえー、思わぬ所でつながりがあったんだね』

『私1人じゃ途方に暮れてたかも』

『やっぱり、麗奈の言うとおり運命の人なのかな？』

『ね、言ったでしょ。私の思い続けた気持ちは無駄じゃなかったってことね』

『あつ、私行かなきゃ』

時計を見た智美が立ち上がった。

『どこ行くの？』

『無理言つてここに寄せてもらったの。スタッフと一緒にホテルに泊まらなきゃいけないから』

『智美、頑張つてね』

『麗奈もね』

『気をつけてね』

『美幸姉ちゃん、また来るね』

智美は部屋を出て行つた。

『智美に会つて俄然元気になったね』

『うん！智美も頑張ってるんだもん。私も頑張んなきゃ』

『あんた達はそんじょそこの姉妹より姉妹らしいよね』

『長い付き合いですから』

『そりゃそうだ』

美幸の言葉に、船の汽笛も納得するかのように鳴っていた。

第13話

ホテルに戻った雅夫は、時間を持て余していた。

『もう一軒どこか行くか』

ジャケットを羽織り、部屋を出てフロントに行った。

『あの、すいません』

『はい』

『近くに1人で呑めるバーはありますか？』

フロントマンは周辺の飲食店が載ってる地図を見せた。

『このbのマークが、全部バーになります』

『結構あるんですね。お勧めの店ってありますか？』

フロントマンは考えて、

『このバックロードっていうお店は狭いですが、お1人で行かれるには最適かと』

『そうですか。ありがとうございます。早速行ってみます』

雅夫はホテルを出て、その店に向かった。

狭い路地を50m程入った所に、バックロードがあった。

年代物の重たい木の扉を開けると、マスターがグラスを磨いていた。客は誰もいない。

『いらつしやいませ。あつ、あなたは』

『あつ。先程は失礼しました』

思わぬ所で雅夫と後小路は再会した。

『どうぞ』

雅夫は椅子に座り、店全体を眺めている。バックには心地よいジャズが流れている。

『雰囲気の良いお店ですね』

『ありがとうございます。何かお作りしましょうか？』

『では、ギムレットを』

『かしこまりました』

シェーカーからカクテルグラスに注がれ、雅夫の前に出された。

『お待たせしました』

『いただきます』

雅夫は一口飲んで、

『フレッシュライムを使ってるんですね』

『はい。ライムジュースを使う所もありますが、当店ではフレッシュライムを搾って使ってます。如何ですか？』

『凄く美味しいです。ギムレットとジンライムは別物と思ってますから』

『あの、お名前を伺っても宜しいですか』

『まだ名前も言ってなかったですね。大下と言います』

『大下さんはカクテルお詳しいようですね』

『いえ、ただ好きなだけです』

『それが1番です。大下さんは東京の方ですか？』

『福岡から来ました』

『先程のお連れの方ですか？』

『いえ、田舎は同じですが、彼女はこっちで働いています。2人共舞さんの後輩なんです』

『そうでしたか。お客様の内情を詮索するのはタブーなのですが、良ければ何故、舞を探してるのか教えていただけませんか？』

雅夫は高校時代から今までの話を、全て後小路に話した。

『そうだったんですか…』

『ええ、すんなり会えると思ってましたが、うまくいきませんね』
『そうですね』

後小路は何やらカクテルを作っている。

『どうぞ』

『これは？』

雅夫の前に出されたのは、淡いピンク色のカクテルだった。

『舞をイメージして作ったカクテルです。名前はつけてませんが』

雅夫は口に含んだ。甘さと苦みが微妙なバランスで調合されている。

『初めての味です。キザなようですが、舞ちゃんのイメージがそのままグラスに入ってるようで、鮮明に蘇ってきました』

『これは舞と大下さん以外には作ってないんです。これから作ることはないです』

『どんな高価な酒よりも、自分にとっては心を打たれる物がありました。バーテンダーって、ある意味芸術家ですよ』

『レシピをお教えしましょうか？』

『いえ、これはこのバーで後小路さんが作られるから、価値があるんですよ。東京に来る楽しみが1つ増えました』

『バーテンダー冥利に尽きる言葉です』

『では、そろそろ帰ります』

雅夫は席を立った。

『また是非いらしてください』

『はい、ギムレットとこのカクテルを又呑みにきます』

『ありがとうございます』

勘定を済ませ、

『ご馳走さまでした』

『おやすみなさい』

雅夫はホテルへ戻って行った。

第14話

翌朝、チェックアウトの準備をしてみると、律子から電話がかかってきた。

『福岡までの飛行機のチケットとつといたよ』

『ありがとう。もうすぐ下に行くよ』

フロントで精算を済ませ、律子がチケットを渡してくれた。

『助かったよ。ありがとう。元気だね』

『先輩もね。今度帰るから、みんなで飲み会をしようね』

『おう、連絡待つてるよ』

『先輩…』

律子が涙目になっている

『どうしたの？』

『……ううん、何でもないよ。行ってらっしゃいませ！』

『じゃあね』

雅夫はホテルを出て駅に向かった。

飛行機のチケットが入っていた封筒に、手紙が入っていた。

「先輩が舞ちゃん先輩を大好きなように、私も先輩が大好きだよ。ずっとなね」

律子の気持ちは薄々感じていた雅夫だが、舞のことが頭から離れない。律子が東京に行ったせいもあり、雅夫も距離をおいていた。

『りっちゃん…ありがとう…』

飛行機の機内で、雅夫は舞との思いを巡らせていた。

『そういえば、2人で別府に旅行に行ったよなあ』

雅夫が高校2年の夏休み、部活の合宿と嘘をついて舞と別府へ旅行に行った。

『まーくん、親にバレないかなあ』

『バレたらバレた時。一緒に謝るよ』

『お父さんに殴られるかも』

『それで許してもらえるなら我慢するよ。大丈夫だって。最初に約束したじゃん。舞ちゃんを大事にするって』

『私、怖い』

『何で？』

『まーくんがいつか私を嫌いになっていくんじゃないかって』

『有り得ないよ』

『おばあちゃんになっても？』

『うん、白髪で腰が曲がって入れ歯になってもずっと愛し続けます』

『じゃあ』

舞が小指を出した。

『指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ますっ』

『約束だよ』

『舞ちゃんもオレがボケてハゲても一緒にいてよ』

『えーっ、どうしよっかな』

『何だよ、それ』

『うそうそ、まーくんが死ぬまで一緒にいるよ』

『死ぬまで一緒…か』

親の職業の違いで成就できない恋愛。何か古めかしいが、どこか、
家、を重んじる独特の悪しき伝統が根付いてるものだ。

雅夫を乗せた飛行機は福岡空港に着陸した。到着ロビーに出たところ
で、健四郎から電話が来た。

『よっ、着いたかい？』

『ああ、今着いたところ…って、よくわかるなあ』

『三沢から何時に着くか聞いたからね』

『行動を読まれてるってあまり気持ちいいもんじゃないな』

『どうだい、軽く一杯？』

『いいねえ』

『早く来いよ。いつもの所で待ってるから』

家に戻り、荷物を置いた雅夫は居酒屋に向かった。健四郎は既に一杯やってた。

『よっ、今日はエラく早いな。あっ、生ビールちょうだい』

店員が突き出しと生ビールを持って来た。

『乾杯っ』

雅夫は一気にジョッキを空けた。

『東京での収穫は？』

『うん、舞ちゃんに子供がいるらしいってどこまではわかったけど…』

『結婚してたの？』

『自ら破談にして1人で育ててる…らしい』

『シングルマザーってやつ？』

『うん、それ以上のことは分からずじまい』

『そっかあ。そういえば、美幸ちゃんから連絡あった？』

雅夫は焼酎を頼んだ。

『あつたよ。明日、鶴見岳で会うことになってる』

健四郎も焼酎のお代わりを頼む。

『何で鶴見岳？』

『知らないよ。俺が聞きたいよ』

『ヨリを戻そうって言われたりして』

『あんな別れ方したんだから、それはあり得ないよ。とにかく、明日行ってみるよ』

『休みはまだまだあるし、ついでに温泉にでも浸かってくれば？』
『そうだな』

他愛のない話をして、2人は店を後にした。

第15話

家に着いた雅夫は、舞と旅行に行った時の写真を見ていた。鶴見岳でのツーショット・地獄巡り…

…

『ねえねえ、ほんとの地獄ってこんな感じなのかな?』

地底から沸き上がる泡を見て舞は雅夫に言った。

『んゝ、行ったことないからなあ』

『まーくん、私を捨てると地獄行きだよ』

意味深な笑顔で舞が言う。

『怖いこと言うなよ』

『でも、結婚したら天国に行けまゝす』

『それってプロポーズのつもり?』

『嫌?』

舞は雅夫の顔を覗き込んだ。

『嫌だなんて…謹んでお受けします』

『こういうことって普通男の人がするものよ』

雅夫と舞は向き合った。

『では改めて、舞ちゃん、僕と結婚してください』

『はい』

『なんか恥ずかしいなあ』

『ねえねえ、子供の名前どうする?』

『ちよつと早すぎやしねえかい?』

『いいじゃんいいじゃん』

『うーん、そうだなあ、女の子なら麗奈。なんかかわいくない?』

『男の子なら夢雅。まーくんの名前と夢をかけてみましたあ』

『決まりだね』

『うん、私が20歳になったらまーくんの子供を産むね』

『リアルだなあ』

『早く子育てをして、40になったらまた2人でラブラブになるの』

……』

……

翌朝、麗奈の荷物を積んだ美幸の車は、鶴見岳に向かった。

『私の荷物も持っていくの？』

麗奈が美幸に尋ねた。

『麗奈は天下君の家に住むようになるから』

『もうヤダーっ、美幸姉ちゃんったらあ』

麗奈は美幸の肩を叩きながら言った。

『天下君が断れば、私んちに帰ってくればいいんだし。ヤツが断ることは120%ないけどね』

『そのココロは？』

『よくわかんない』

『なにそれっ』

『これだけは間違いないわ。麗奈で天下君の心が打ち解けないようなら、誰もアイツは救えないよ』

『う…ん。美幸姉ちゃんプレッシャーかけるなあ』

雅夫も鶴見岳に向かって車を走らせていた。美幸と会って、何を話せばいいのか、頭の中でいろいろ考えていた。

先に着いた美幸と麗奈は、ロープウェイで頂上に登った。

『少し寒いね』

下界は緑の木々も、頂上ではすっかり紅葉が進んでいる。

『ほら、あそこ』

美幸の指差した先には、舞と雅夫が写真を撮った石碑があった。

『ここが…』

『そうよ。ここから麗奈と天下君は新しい一步を踏み出すのよ』

『なんかドキドキしてきたよ』

麗奈は美幸の手を掴んだ。

『麗奈は普通にしてれば大丈夫!』

『普通って言われてもなあ…』

待ち合わせの時間の10分前、美幸の携帯が鳴った。

『着いた? 頂上の石碑の前にいるから』

電話を切った美幸は麗奈に言った。

『麗奈、もうすぐ来るよ。私は仕事があるから帰るね』

『一緒にいてくれるんじゃないの?』

『私の役目はこれでおしまい。荷物は大下君の車に積んどくよ。下

りのロープウェイが来るから、じゃあね』

『美幸姉ちゃん』

『何?』

『ありがとう』

『今夜の私のラジオ、聞けたら聞いてね』

『うん』

美幸は下界に降りて行った。

麗奈は雅夫に会える期待と不安に胸を躍らせている。何度も前髪をいじり、そわそわして落ち着かない。

入れ替わりに登って来たロープウェイから何人かの人が降りてきた。その中に雅夫の姿があった。雅夫は石碑の前にいる麗奈に向かって歩いてきた。

『あつ!! ま、舞…ちゃん?』

感激のあまり、やつとの思いで麗奈は声を発した。

『やつと逢えましたね。え〜つと…』

雅夫は訳のわからないまま、自己紹介をした。

『大下、大下雅夫です』

舞と初めて会った時がフラッシュバックした。

『私は、桜田麗奈です。舞は私の母です』

『えっ、舞ちゃんの娘…かあ』

雅夫は辺りをキョロキョロしてる。

『どうしたんですか?』

『いや、待ち合わせ…』

『美幸姉ちゃんなら帰りましたよ』

『美幸姉ちゃん?』

『私の親友のおばさんなんです』

『おばさん…』

雅夫は理解に苦しんでるようだ。

第16話

『あのお…私と写真を撮ってもらえますか？』

『えっ？構わないけど』

麗奈はバックに入れてたデジカメを近くにいた人に渡して、

『すいません。シャッターを押してもらえますか？』

雅夫と麗奈は石碑の前で写真を撮った。あの頃の舞と同じように。

『ありがとうございます』

麗奈はデジカメを受け取り、雅夫のもとに戻ってきた。

『すいません。わがまま言って』

『そんなことないよ。ファミレスでも行って座ろうか』

『はい』

雅夫と麗奈はロープウェイで下り、車に乗り込むと麗奈の荷物と車の鍵とメモが置いてあった。

「借りてた鍵、やっと返せたよ。麗奈のこと、よろしくね。泣かせたらタダじゃ置かないから」

『そういえば、美幸ちゃんに鍵渡したままだったんだ』
2人は近くのファミレスに入った。

『何でも好きなのを頼んでいいよ』

『はい。じゃあ、ストロベリーパフェ』

『ストロベリーパフェとホットコーヒーを』

『かしこまりました』

『それで、麗奈…ちゃんは、何故ここに？』

『美幸姉ちゃんに連れて来てもらったんです』

『そうなんだ。この前、夜に車の前に飛び出したのも麗奈ちゃんだよ』

『あの怒鳴られた時ですね。すいませんでした』

麗奈は頭を下げた。

『いや、責めてる訳じゃないんだ。ところで、舞ちゃんは元気？』

『母は…病気で死にました』

雅夫の顔から血の気が引いた。

『えっ！？それは…いつ？』

『4年前、私が中1の時です』

『4年も前に亡くなってたんだ…』

ショックを隠せない雅夫。

『お待たせしました。コーヒーとストロベリーパフェです』

テーブルに置かれ、

『あ、どうぞ』

『いただきます』

雅夫は動揺してて、コーヒーを飲んでも味がしない。一方、麗奈はパフェを美味しそうに食べている。

『そつかあ、じゃあ、今は舞ちゃんの両親と住んでるの？』

『いえ、1人暮らしです。おじいちゃんとおばあちゃんには言うなと母に言われたので』

『何故？』

『誰にも迷惑をかけられないから…麗奈は誰にも渡したくないって舞は頑^{かたく}なに両親を毛嫌いしていたのがわかる。』

『1人暮らしって…今までどうやって過ごしていたの？』

『母の残したお金とバイトで生活してます。私が高2になったらこれを読みなさいって』

雅夫に手紙を渡した。

『読んでいいの？』

『はい』

麗奈へ

お母さんが麗奈と同じ年の時に、まーくんという運命の人に出会いました。その人はとても優しく、頼りになる人です。お母さんは病

弱だから、麗奈が大人になるまで生きていないかもしれない。もし、1人になっても絶対弱音を吐かないこと。頑張って生きていくこと。それでも辛い時は、まーくんを尋ねてみなさい。お母さんは麗奈とまーくんの心にいます。母より

『これは大下さんにつて母から』
相当昔に書いたであろう、ほんのりセピア色に染まった封筒と、比較的新しい封筒の2通を渡した。

まーくんへ
いきなりあんな別れ方をしてごめんなさい。ああいう方法しか見つからなくて。今になって、何故別れたのか後悔してます。でも、心の中にまーくんはずっと笑顔でいてくれるから、どんな苦労にも頑張っていけるよ。私はまーくんの思い出を糧に、ずっと生きていくね。

昭和62年2月14日
舞より

雅夫はもう1通の封筒を開けた。死期が迫ってる時に書いたのか、便箋の字が弱々しい。

まーくんへ

娘の麗奈と、私の病気が治ったらまーくんに会いに行こうと約束したけど、叶えられそうにないみたい。生きてる間に、もう一度会いたかった。声が聞きたかった。そして抱きしめてほしかった。もし、次に人間として産まれたら、今度こそほんとに結婚しようね。まーくんは死ぬまで一緒にいるって言うてくれたのに、先に約束を破ってごめんね。麗奈は私にそっくりでしょ？麗奈を私と思って見てく

れたら嬉しいな。私の分まで長生きしてね。まーくに奥さんや彼女がいなかったら、麗奈のことを宜しく願います。

舞より

雅夫は泣いた。今までの舞との思い出がわき水のように絶え間なく込み上げてきた。

第17話

『ごめんね。なんか情けないところ見せちゃって』

ハンカチで涙を拭った。

『いいえ、大下さんってほんとに母を愛していたんですね』

『えっ？』

『いろいろ聞きましたから』

『良いことも悪いことも』

『ええ、いつも母が大下さんの話をする時、高校生の顔になってたんです。それを見て、私も大下さんに興味を持って、早く会いたいと思ってあの夜も大下さんの家を探していたんです』

『そっかあ。あの時は余りにも似てたもんだから、タイムマシンで舞ちゃんがやって来たかと思っただよ』

『そんなに似てますか？母と』

『髪型・顔は勿論、声や仕草も似てるよ。親子っていうよりも双子みたい。高校の時の舞ちゃんしか知らないから、余計にそう思ってしまうのかも』

『仕草？』

『そう、落ち着かなくなると前髪を触る癖…とかね』

『ははっ、これは母親譲りだったんですね』

『言いつつ、又前髪を触っている。髪型を変えたのは正しかったと、麗奈は心でガッツポーズをした。』

『あの〜』

『ん？』

『ダメ元で聞くんですが、私もまーくんって呼んでいいですか？』

『いいよ。なんな照れるな。そうに呼ばれるの、舞ちゃん以来だからなあ』

『まーくんっ。キャハっ！呼んじやったあ。あ、あと、タメ語で話してもいいですか？』

『全然構わないよ』

『よかったあ』

麗奈の顔から緊張がほぐれてきた。

『よしっ、帰ろうか…って麗奈ちゃんの家ってどこ？』

『東京の八王子。学校も八王子だよ』

『は…八王子…。そっかあ。舞ちゃん東京にいたんだもんね。だったら家に来る？狭苦しいとこだけど』

『いやらしいことしないなら』

『バ、バカっ、そんなことしたら舞ちゃんに怒られるよ』

『そりゃそうだ。じゃあ、まーくんの家にGO！』

『イエッサー』

別府の夜景を背に、2人は福岡に帰って行った。

助手席に座ってる麗奈の姿が、舞のあの言葉を思い出させた。

『私は助手席に乗りたいのっ…』

雅夫の心は痛んだ。

『そういえば、美幸姉ちゃんがラジオ聞いてって言ってたよ』

雅夫はラジオのスイッチを入れた。美幸の番組は既に始まっていた。

『美幸姉ちゃんの声だあ。ラジオから聞こえるってチヨー感動！』

『この番組って結構人気があるんだよ』

選曲のセンスの良さと、美幸の辛口トークが幅広い世代の支持を得ている。

『早良区のラジオネーム、ミューさんからのメールです。麗奈ちゃん、やっと会えてよかったね。雅夫君と仲良くね。ミューさん、ありがとう。リクエストは麗奈ちゃんと雅夫君にということ…』

『ミューって…』

『多分、美幸ちゃんのラジオネームじゃない？自作自演でメッセージを流したんだよ』

『なんか恥ずかしいね』

『公共の電波を私物化して…』

雅夫は言葉とは裏腹に微笑んでいた。
家に着いた2人は

『どうぞ』

『お邪魔します』

『へえ、意外と綺麗にしてるんだ』

『でしょ？』

『あつ、お母さんの写真。飾ってくれてるんだね』

本棚の上の写真を見て麗奈が言った。

『ジューズでいい？』

『はい』

雅夫がジューズを持ってきた。

『麗奈ちゃん』

『はい？』

『お母さんの病氣って何だったの？』

『乳ガン』

『ガン…か』

『病院に運ばれた時は、手遅れだってお医者さんが言ってた。具合が悪くても病院に行かずに朝昼晩仕事ばかりしていたから…』

『そうなんだ』

『うちは母子家庭なんだから、お母さんが2倍働かないと、って口癖のように言ってたんだよ』

『…舞ちゃん、頑張りすぎたね』

『私、お母さんのお葬式では全然泣かなかったんだよ。泣いちゃったら…ゆっくり眠れないかなって思って。今までお母さんのことで全然泣いたことないんだよ…』

気丈な性格も舞譲りだった。しかし、雅夫に会ったことで安心したのか、麗奈の声が涙声になってる。

『麗奈ちゃん…』

『だからさ、今、泣いていい？』

『うん、思いっきり泣きな。一生懸命頑張ったもんね』
『うん』

麗奈は雅夫の胸で堰切ったように泣いた。雅夫はしっかりと麗奈を抱きしめていた。

第18話

麗奈は泣き疲れて、そのまま雅夫の胸で寝てしまった。麗奈をベッドに寝かせ、雅夫はソファで寝た。

朝、雅夫は味噌汁の匂いで目が覚めた。

『おはよう』

『まーくん、おはよう』

『麗奈ちゃん、料理ができるんだ』

『家では毎日自炊してるんだよ』

『へえ、凄いね』

『お母さん仕込みの味だから、まーくんにも気に入って貰えると思うんだけど。もう少しでできるから、まーくんは新聞でも読んでまっつてね』

しばらくすると、テーブルにはご飯、味噌汁、卵焼き、納豆、漬け物が並んだ。

『いただきまーす』

雅夫が味噌汁をすすった

『どう？』

不安そうに麗奈が聞いた。

『うん、美味しいっ！』

『よかったあ』

『卵焼きも絶品！』

『どれが一番美味しい？』

『納豆』

『はい、片付けまーす』

『冗談冗談、全部美味しいよ。麗奈ちゃん、いいお嫁さんになれるよ』

『そう？嬉しいなあ。初めて男の人にご飯作ったから、ちょっと心配だったの』

『彼氏は？』

『そんなのいないよ』

『ずっと？』

『うん』

雅夫のことが好きだと喉元まで出かかっていたが、我慢した。会って何日も経ってないので、麗奈なりに告白するにはまだ早いと思っていた。

『これからいい出会いが沢山あるよ』

『うん、どうせ恋愛するならお母さんみたいな恋愛がしたいな。一生その人を愛せるような』

『恋愛観まで舞ちゃんのまんまだね』

相変わらず恋愛に関しては鈍感な雅夫。麗奈が話を振ってるにも関わらず、全く気付いてない様子だ。

『親子ですから』

『恐れ入りました。ご馳走様でした。美味しかったあ』

『お粗末でした』

麗奈は台所に立ち、片付けを始めた。

『麗奈ちゃんは今からどうする？』

『まーくんはお仕事でしょ？』

皿を洗いながら答える麗奈。

『休みを取ってるから、まだ行かなくていいよ』

『だったら、私とデートしよっ』

『いいよ。どこ行きたい？』

『遊園地！』

『子供だなあ』

『どうせ子供ですよーだっ』

雅夫にアツカンバーした。

『そうだ。その前に連れて行きたい所があるんだけど…』

『どこどこ？』

『まあ、ついてくればわかるよ』

雅夫と麗奈は車に乗り込んだ。

高速で1時間ほど走って、学校の前に着いた。

『ここは？』

『オレと舞ちゃんが出会った高校』

『へえ、そうなんだ』

4階の角を指差して

『あれが音楽室。あそこで部活やってたんだよ』

『お母さんが一番幸せな時期だったのね』

『少し歩こうか』

『うん』

学校の塀に沿って歩いていくと森に差しかかる。

『ここを毎日2人で帰ったんだよ』

麗奈は、舞と雅夫が初キスをした時の話を思い出していた。

雅夫は高校時代にタイムトリップしてた。

森を抜けると公園があって、小さなステージがある。

2人はステージに上がった。雅夫は久々に見る風景を懐かしんでいた。初めて舞とキスをした場所は何も変わってなく、20年前の記憶が鮮明に甦ってきた。麗奈は舞と同じ視線で雅夫と同じ景色を見ている。

……

付き合い出して4ヶ月経った雨の日、部活を終えた雅夫と舞はいつものように家へ帰っていた。

『雨ってなんかロマンチックだね』

舞が言った。

『そう？オレはうつとうしいから嫌いだな』

『雨音ってリズムを刻んでるみたいで、その時によって楽しかったり、悲しかったり聞こえない？』

『今日の舞ちゃん、ロマンチストだね』

『そんなことないよ』

『じゃあ、今の雨音はどいう風に聞こえる?』

『そうだなあ、優しく包み込むように聞こえるよ』

『こんな風に?』

雅夫は傘を横に倒し、舞の唇に優しくキスをした。舞は雅夫を強く抱きしめていた。

『まーくん…愛してる』

『オレも…』

……

『ここでまーくんがお母さんにキスしたんでしょ?』

『えっ!—!』

舞との思い出にふけっについて、唐突な言葉にびっくりする雅夫。

『雨の日で傘で隠しながら…』

『舞ちゃんってそんなことまで話してるの?』

『ねえ』

『ん?』

チュッ

『!—!』

麗奈は雅夫の頬にキスをした。

第19話

『麗奈の初キスでございまーす。お母さんのこと、リアルに思い出した?』

『とても...』

雅夫の頭の中は、幻想と現実が入り乱れていた。隣にいるのは舞じゃない。でも確かに舞のDNAを引き継いでいて、しかも生き写しの麗奈が隣にいる。今まで舞以外は受け付けなかった雅夫の心が、急速に麗奈に傾き始めていた。

『まーくん、どうしたの?』

雅夫は放心状態になっている。

『いや、びっくりして』

『キスしたのが?』

『うん...』

麗奈は心配そうに雅夫を見た。

『私のこと、嫌いになった?』

『ううん、そんなことないよ』

好きだとは言えない雅夫。

『よかった』

『麗奈ちゃん、初キスって...』

『そうだよ。生まれて初めてのキスが今、まーくんにしたやつ』

麗奈はあっけらかんと言った。

『そんなのは大事な人の為にとつとかないと』

だからまーくんにしたんでしょ、と言いたいのをこらえて、

『いいのよ。練習だから。ちゃんと本番では失敗しないようにしないと』

かわいくないなあ、と心の中で麗奈はつぶやいた。

『練習台かよ』

『そうよ...。それよりも』

『はい？』

『遊園地！』

『あつ、そうだね。行こ行こ』

歩いて来た道を戻って、車に乗り込み、遊園地に向かった。休日なら駐車場に入るだけでも、かなり待たされるが、平日は待ち時間もなく、すんなり入ることができた。

『着いたあ』

入場料を払い、ゲートをくぐると、麗奈は絶叫マシンの乱立するエリアに走って行った。

『あのさ、オレ、絶叫マシンって苦手なんだけど…』

『知ってるよ。お母さんから聞いてるもん』

『違うのに乗らない？』

『えーっ、面白いじゃん。苦手なら今日克服しよっ』

『克服って言われても…すぐにはムリだよ』

『大丈夫、怖かったら私が手握ってあげるから』

『いや、そういう問題じゃなくって…』

『お母さんは絶叫マシン大好きだったよなあ』

『それ言われると弱いなあ』

当時は‘しょぼい’マシンしかなかったから、何とか無理すれば耐えられたが、今のは雅夫の許容範囲を遥かに越えてる。

『じゃ、最初はこれ』

麗奈が選んだのは、直下型のジェットコースターだ。

『絶対無理。無理無理』

『無理じゃない。はい、行こうね』

麗奈に手を引かれ、乗り場に行った。

順番が回って、コースターに乗り込んだ。

『一番後ろが一番怖いのお』

麗奈が笑いながら最後尾に座って言った。

『大丈夫、死なないから』

雅夫は完全に萎縮してしまってる。

麗奈が雅夫の手を握った。

『まーくん…』

顔が青くなっている雅夫を見て、麗奈の握ってる手の力が強くなった。

『大丈夫…』

『私がついてるからね』

「発車しまーす」

雅夫は死刑台のエレベーターを上ってるように感じた。

スタートからゴールまで約3分だが、雅夫には何倍にも長く感じた。

『あゝ、おもしろかった』

『あゝ、怖かった』

『まーくん、よく頑張ったね』

麗奈が雅夫の頭をなでた。

『オレは子供かよっ』

『だって、ずっと目をつぶってるまーくん、かわいいんだもん。ねえ、知ってる？目をつぶってるほうが怖さが倍増するんだって』

『そうなの？』

『周りが見えないと不安になるでしょ？』

『まあ、確かに』

雅夫は微妙に納得した。

『じゃあ、次はこれに乗ろっ』

水に飛び込むジェットコースターに乗った。

『これならオレも大丈夫』

『私のレベルではお子ちゃまね』

『はいはい』

これは一番前に乗った。頂上から滑り落ちる時の水しぶきが、容赦なく2人を襲いかかった。

『もう、ビショビショだよ』

ビニールのポンチョを着て乗ったものの、ずぶ濡れの雅夫と麗奈。スタッフからタオルを受け取って頭を拭いた。

『今時期だとかなり寒いよね』
『クシュンッ』

麗奈がくしゃみをした。

第20話

『風邪ひいたら大変だよ』

雅夫は自分の着ていたジャケットを脱いで麗奈に被せた。

『ありがとう。まーくんの匂いがする。とっても暖かいよ』

2人は乗り物を片っ端から乗りあさった。久しぶりに遊園地に来た雅夫は、童心に戻っていた。

『次はここに入ろう』

お化け屋敷の前に来た。

『私、こういうのダメなんだよ』

さっきの反撃とばかりに、

『ダメだったら今日克服しようよ』

『あゝっ、私の真似してるし』

雅夫は麗奈の手を引いて中に入った。

真っ暗な通路に案内を示すランプが怪しく光っている。麗奈は雅夫の腕を痛いくらいの力で掴んでいる。

『麗奈ちゃん、腕、痛いんだけど』

『だって、怖いんだもん』

脇から何やら飛び出してきた。

『キヤーッ』

雅夫に抱きつく麗奈。

『大丈夫だよ。全部作り物なんだから』

雅夫の言葉は耳に入っていないようだ。

脅かす側からしたら完全に‘カモ’にされてる麗奈を、これでもかってくるくらいに偽物のお化けは襲ってくる。出口の明かりが見えても麗奈は怖がっていた。

『面白かったね』

外に出て、雅夫が言った。隣にいる麗奈は半泣きの顔になっている。
『もう、怖かったんだからね』

『さつきはオレが怖かったんだよ』

『女の子を泣かせるなんてサイテーッ』

『怒ってるの?』

麗奈は膨れっ面で雅夫を見ていた。

雅夫は目の前にあったワゴンでチュリトスを買った。

『はい』

無言で受け取り、食べる麗奈。

『…許す』

『結局、お腹がすいてたのね』

『ちよつとね』

麗奈に笑顔が戻った。

『食べる?』

麗奈から食べかけをもらって雅夫は食べた。

『あゝっ、間接キスだあ』

その発想、まだまだお子ちゃまだ。

だんだんと日が傾き始めてきて、肌寒くなってきた。

『最後は観覧車に乗ろうっ』

ゴンドラは上へとゆっくり上っていく。

『まーくんもお母さんとこんなデートしたの?』

『うん、動物園行ったり映画みたり…毎日一緒にいれるだけで幸せ

だったよ』

『そつかあ。私、おばあちゃん嫌い』

『何故?』

『だって、お母さんとまーくんを引き離れたんでしょ。お母さんの

幸せをおばあちゃんが奪ったんだもん』

『それは違うよ』

『何が違うの?』

『人間ってそれぞれ運命を背負って産まれてくるんだよ。オレと舞ちゃんが出会い、別れ、麗奈ちゃんと出会う。神様が作ったシナリオで生きてるんだよ』

『神様…』

『うん、何十億もいる人間に産まれて、その内の1人の運命の人に
出逢うのって凄い確率って思わない?』

麗奈は大きくうなずいた。

『私がまーくんに出会ったのも?』

『そう、オレ達2人が同じ人を知り合つてて、こうやって出会った
のは、神様と舞ちゃんの導きがあったからじゃないのかな?』

『そうだよね』

『もし、舞ちゃんがオレと結婚してたら、麗奈ちゃんは産まれてな
かったかもしれないよ』

『うん』

『振り返ったって時間は戻ってこないから、前を向いて行くしかな
いんだよ。明日は今日より良いことがあるって信じてね』

『私、まーくんに出会えてよかった。お母さんの子供でほんによ
かったよ』

『舞ちゃんが聞いたらきつと喜ぶよ』

『ありがとうございました』

ゴンドラを降りると、閉園のアナウンスが流れた。

『遊園地も終わっちゃうね』

『次行こっか』

『どこに?』

『ロマンチックな所。麗奈ちゃんには合わないかな?』

『いつも子供扱いしてえ、ヤな感じっ』

『怒った麗奈ちゃんもかわいいよ』

『バーカッ、もう知らないっ』

麗奈は先に駐車場に走って行った。

『おーい、待ってよーっ』

第21話

雅夫と麗奈は小高い丘に夜景を見に行った

『うわー、宝石みたい』

『綺麗だろ』

『うん』

『あれがさっきの遊園地の観覧車だよ』

雅夫が指差した先には、観覧車のイルミネーションが鮮やかに光っている。

『お母さんにも見せたかったなあ』

『そうだな』

周りには何組かのカップルがいた。

『カップルってこういう所で口説くんでしょ？』

『そうだね、シチュエーションは大事かな？』

『まーくんは美幸姉ちゃん以外、誰かと付き合ったの？』

『ううん、誰も』

『マジ！？』

『大マジ。美幸ちゃんから聞いてると思うけど…本気で付き合えなかった。オレが心底好きだったのは、舞ちゃんが最初で最後…』

『…』

2人は黙って夜景を見ていた。

『麗奈ちゃん』

『なーに？』

『こんな未練タラタラで舞ちゃんを引きずってるオレって、おかしいかな？』

『おかしいよ。別れて10何年も経ってるのに、1人を思い続けるなんて…バカだよ』

『そうだよな…』

『バカだよ…お母さん』

『えっ？』

雅夫は麗奈を見た。正面の夜景を見ながら話し続ける麗奈。

『こんな素敵な人を振るなんて…私だったら、どんなことがあっても離れない。親が何と言おうが、勘当されようが、絶対離れないよ！』

麗奈は唇をかで、悔しそうに言った。

『舞ちゃんに非はないよ。誰も悪くない、誰もね』

『優しいすぎるよ。お母さんは先に死んじやったけど、残されたまーくんの方が絶対かわいそうだよ』

『舞ちゃんだって、別れたくて別れたんじゃないから』

『だから余計だよ。親が恋愛するんじゃないんだもん。本人がするもんでしょ？』

『舞ちゃんは両親とオレの間で、板挟みになってたんだよね。それを気付いてやれなかったオレも悪いんだよ』

『いつまで格好つけるつもりなの？死んだ人を想ってたって、生き返ってこないんだからね』

麗奈は自分でも驚くくらいの熱弁をふるっていた。雅夫は麗奈の言葉のパンチにノックアウト寸前だった。舞が死んで誰よりも悲しく辛いのは、自分ではなく麗奈なんだと、雅夫は思った。

『麗奈ちゃん、ごめんね』

麗奈は雅夫を背後から抱きしめた。雅夫は涙をこらえるのに必死で、言葉が出なかった。

『これから、私がずっとまーくんの側にいるね』

麗奈の言葉に首を縦に振る雅夫。

『まーくん、泣いてるの？』

今度は横に振る。

麗奈がハンカチを渡すと、雅夫は黙って受け取った。

『見てなかったことにするね』

『…はい』

眼下のイルミネーションが少しずつ消え始めてきた。

何事もなかったかのように朝を迎え、麗奈が作った朝食を食べていた。

『私、そろそろ八王子に帰ろうかと思うんだけど』

『そうだね。学校も行かなきゃいけないし』

『送ってくれる？』

『どこまで？』

『八王子まで』

『はい？』

『だめ？』

『いや、いいけど』

『まーくんの車、大きいから寝ながら行けるし、交通費の節約にもなるしね』

『ちゃっかりしてるのね』

『学生兼主婦ですから』

『まーくんに来てもらいたい所もあるし』

『じゃあ、明日は八王子までのクルージングといきますか』

『はい』

『じゃあ、今日は天神に行こう』

『うん』

平日の天神は人もさほど多くなく、買い物するにはちょうどいい。

『あの服、かわいくない？』

『どれ？』

マネキンが着ている、チェックのミニスカートとベストを指差した。

『かわいいね。麗奈ちゃんなら似合うと思うよ』

『でも、無駄遣いできないし…』

『ご飯作ってくれたお礼に好きなのを買ってあげるよ』

『ほんとにつ！』

『うん』

『いろんなお店回って一番いいのを買うね。まーくんの意見も聞か

『せてね』
『オツケー』

第22話

ファッションビルを上から下までくまなく回り、若い女性が好みそうな店に入っては、鏡に向かって服を自分に当てて考えこんでいる。

『うーん、悩むなあ』

『どっこのが好みなの？』

雅夫が麗奈に聞いた。

『かわいいけど、かっこいい服』

『難しいなあ』

『まーくんはキュートな服と大人っぽい服、どっちが好き？』

『かわかっこいい服』

雅夫は、我ながらウマイことを言っただけだと思っていた。

『何？その中間をとりました、みたいな中途半端な意見』

『ダメ？』

『ていうか、そういう服を探してるのよ』

『最初に麗奈ちゃんが見てた服、かわかっこよくない？』

『マネキンが着てたやつ？』

『うん』

『私もあれはいいなあ、って思ってたんだ』

『もう一回見に行ってみようか』

『うん』

始めに目が留まった店に戻ってきた。

『あれって試着できるのかなあ……』

『いらっしやいませ』

店員が出て来た。

『あのー、表のマネキンが着ている服、試着できますか？』

『できますよ。どうぞ』

『できるって。着てみるから感想聞かせてね』

『うん』

奥の試着室に入って行った。

『ああやって服を選んでる顔は普通の高校生だよなあ』

『かわいい彼女さんですね』

店員が雅夫に話しかけた。

『はあ…』

雅夫は彼氏彼女に見られてることに少し安心した。

『あの服は彼女さんくらいの体型に合わせて作られたんですよ』

店員のセールストークが冴える。

試着室の扉が開いた。

『どう？』

店員の言う通り、確かに似合っているし、サイズもピッタリだ。

『うん、最高』

『ほんとっ！』

『マジでかわいいよ』

『これに決めるね』

『うん。じゃあ、これを』

『ありがとうございます』

『あつ、すみません。これを着ていくんでこの服を包んでもらえますか？』

『いいじゃん。今まで着てた服を着とけば』

『気に入った服はすぐにでも着たいですもんね。値札を取りますね』

店員は試着室に残された麗奈の服を袋に詰めた。

『今着ている服に、このブーツも一緒に合わせたらかわいいですよ』

店員が黒いスエード地の編み込みブーツを持ってきた。

『まーくん…』

『履いてみたら？』

ブーツに足を入れ、鏡の前に立った。

『うわあ、マジかわいい…』

『じゃあ、それも一緒に』

麗奈より先に雅夫が言った。

『いいの？』

『こういうのは足元まで揃えないとね。トータルコーディネートってやつ』

『ありがとう！』

『どういたしまして』

勘定を済ませ、雅夫は服の入ってバックを持って、ビルの外に出た。お気に入りの服を纏った麗奈は、歩き方まで変わったようだ。

『こんな服、雑誌で見るだけで着れるとは思わなかったよ』

『たまにはこういう贅沢もしないとね』

『まーくに会えるだけで嬉しかったのに、洋服まで買ってもらって……ほんとありがとう。ねえねえ、私とお母さん、どっちがかわいい？』

振り返って聞く麗奈。

『麗奈ちゃんかな？』

『お母さんかいそ』

『やっぱり舞ちゃんかな』

『麗奈ちゃんかいそ』

『どっちもダメじゃん』

『そういう時は、同じくらいかわいいよって言えばいいじゃん』

『勉強になりました』

『ねえ、腕組んでいい？』

『うん』

2人はカップルのように街中を歩いている。

『そういえば、まーくん』

『何？』

『遊園地の観覧車の中で私のこと、運命の人って言ったよね？』

『えっ、いや、あれは』

『私、びっくりしちゃった。私もまーくんを運命の人って思ってたから』

言葉のあやで言ったなんて今更言える訳もなく、

『麗奈ちゃんもそう思ってたんだ』

『そうだよ。今までずっとまーくんのことだけを思ってたんだから』

『あ、ありがとう』

雅夫は、年齢差・舞の娘ということに恋愛対象に見てはいけな
いと思っている。しかし、麗奈の仕草、顔、声に至るまで舞を思
い出させてしまい、雅夫はこれまでにない葛藤と闘っていた。

第23話

少し遅めの昼食をとり、レストランに入った。

『福岡って都会なんだね』

『東京に比べれば田舎だよ』

『八王子は東京だけど田舎だよ』

『八王子にはいつから住んでるの？』

『私が生まれてからずっと。昔は近くにひいおじいちゃんが住んでいたけど、中3の時に死んじゃった』

『それからは1人で？』

『すぐにまーくんを尋ねようかと思ったけど、子供の私が来たら足手まといになるんじゃないかって』

『今でも子供だよ』

『失礼ねっ！法律上は結婚できるし、体だって大人だよっ』

麗奈の言葉にドキツとした。

『た、確かに結婚はできるよ…ね』

『まーくん、何動揺してるの？あーっ、変なこと考えてるんでしょ！』

『何も考えてねえよ！』

『照れちゃって、かゝわいっ』

『舞ちゃゝん、育て方間違ってるよ』

『間違ってますんよーだっ』

翌朝、眠気眼の麗奈を起こして、八王子に向かって出発した。

『まーくん、今何時？』

『もうすぐ4時半だよ』

まだ夜明けには程遠い時間だ。

『どれくらいかかるの？』

麗奈はあくびをしながら聞いた。

『だいたい12時間くらいかな』

『眠くなったら私が起こしてあげるからね』

『麗奈ちゃんもリラックスして。眠くなったら寝てていいからね』

『うん…眠いからちよつと寝るね』

『おやすみい』

麗奈はフルフラットにした後部座席で二度寝をしている。

広島に入る頃には、すっかり明るくなってきた。宮島のサービスエリアに入った。

車を降りた雅夫は背伸びをした。麗奈は寝起きでボーツとしている。

『トイレに行ってくるね』

『うん』

健四郎から電話が来た。

『今はどこで何してんの?』

『宮島のサービスエリアで休憩中』

『サービスエリアって…高速でどこ行ってるの?』

『八王子に向かってる。そうそう、舞ちゃんのそっくりさん、舞ちゃんの娘だった』

『で、舞ちゃんは?』

『…亡くなってた』

『マジで!?!』

『ああ…』

『残念だったな』

『でも、オレの心の中に舞ちゃんは生き続けてるから』

『何、映画みたいなこと言ってるの?』

『それで、その娘を八王子まで送ってるってわけ』

『なるほどね、いくらそっくりだからって言って手出すなよ』

『そんなことしたら、舞ちゃんに呪い殺されるよ』

『そうだな。まあ、気をつけて行けよ』

『サンキュ』

麗奈がトイレから戻ってきた。

『お待たせ』

『お腹すいた？』

『うん』

『ごはん食べようか』

レストランに入り、朝食を摂った。

『高速道路ついているんな施設があるんだね。私、長い時間高速道路走ったの初めてだから』

『ここは大したことないけど、他の所は温泉があったり、遊園地顔負けの観覧車があったりするんだよ』

『へえ』

食事を終えた雅夫と麗奈は、土産物が並ぶ売店に行った。

麗奈が何やら買い物をしている。

『友達にお土産を買ったの？』

『ううん、はいこれっ』

麗奈は雅夫に小さな包みを渡した。

『開けてみて』

ハートのキーホルダーが中から出てきた。

『私とオソロだよ』

麗奈の手の中にも同じキーホルダーが。

『ありがとう』

『気に入ってくれた？』

『うん、とても』

『こういうのって懂れてたんだあ』

『じゃ、行くか』

再び車は東へ走り出した。

大阪、京都、岐阜を抜けて車は中央道に入った。

『ねえ、まーくん』

助手席の麗奈が話しかけた。

『何？』

『学歴って必要かなあ?』

『急にどうしたの?』

『私、学校辞めようかなって』

『将来、何をしたいかによっては学歴は必要だよ』

『……』

『麗奈ちゃんの将来の夢ってなーに?』

『幸せな家庭。お父さんとお母さんと子供がいて、週末にはみんなで遊びに行ったりするの。それで……』

『麗奈ちゃん……』

『…別に家庭に飢えてるって訳じゃないの。回りの友達とかがたまに羨ましくなる時があって……』

『高校卒業してもそれは叶えられるんじゃないの? 辞めることはすぐできるけど、辞めて入り直すのは大変だからゆっくり考えてみたらず?』

『そうだよ。考えてみる』

相模湖インターを過ぎて、都県境にさしかかった。

『もうすぐ着くよ』

第24話

日が傾き、長い影を作る頃、雅夫の車は八王子の出口を降りた。渋滞を抜け、駅にほど近い住宅街の中に麗奈のアパートがあった。

『お母さん、ただいま』

部屋の片隅の仏壇には舞の遺影と位牌が並んでいる。

『お線香あげさせてね』

雅夫は線香に火をつけ、手を合わせた。

…舞ちゃん、こんな形で会うなんて夢にも思ってたよ。今さ
らだけど、あの時は何も知らずに叩いてごめんね。もっと早く謝れ
ばよかったよ。でも、ちゃんと言って良かった。もしかしたら、麗
奈ちゃんを愛してしまったかもしれない。昔、舞ちゃんを愛した時
みたいに…

舞の遺影は2人で行った旅行の写真の一枚を使っていた。

『お母さんは写真嫌いだったから、これしかなかったの。幸せな時
の写真だからいいよね』

『うん、ずっとあの時のままだね』

『お母さんに何を話していたの？』

『昔、舞ちゃんを叩いたことがあってね。それを謝ってたんだ』

『お母さん言ってたよ。まーくんは私を真剣に愛してくれてた。叩
かれたほっぺは痛かったけど、それ以上に心が痛かった。だからま
ーくんの近くから離れて行っちゃった。私に麗奈って名前をつけたこ
と、お母さん1人で私を育てたこと、全部聞いたよ。まーくんは私
の名付け親でもあるんだよね』

『麗奈ちゃん、自分の名前、好き？』

『好きだよ。まだまだ名前に負けてるけどね』

『そっだね』

『納得するところじゃないでしょ!』

部屋には必要最小限の家財道具しかなく、生活感がない。

『荷物、少ないんだね』

『お母さんが死んでだいぶ処分したから』

『そうなんだ』

『1人で生活する分には、これで充分だよ』

雅夫は、舞の死後から厳しい生活を強いられて来たんだと感じた。

誰かに甘えれば、それなりの生き方が出来たのかもしれない。あえて、誰の援助も受けずに今まで生活してきた麗奈に愛おしささえ感じた。しかし、福岡と東京の遠距離でどういう風にしたらいいのか、雅夫は考えていた。資金の援助なら距離は関係なくできるが、麗奈は納得しないだろう。

『明日、一緒に行ってもらいたい所があるんだ。来てくれるよね』

『いいよ』

『お腹すいたね。何食べたい?』

『ハンバーグ!』

『子供だねえ』

『いいじゃん!』

『じゃあ、買い物に行こつ』

近くのスーパーは、夕食の準備をする人でこった返している。カゴに材料を入れていく。

『なんか、私達夫婦みたい?』

『そうかあ、親子じゃない?』

『いいえ、絶対夫婦です!』

『こりやまた可愛い奥さんだこと』

『当たり前じゃん』

『そこは否定しないんだ』

『事実は曲げられませ〜ん』

会計を済ませ、アパートに戻った。麗奈はエプロンを着け、手際よく料理を始めた。

その姿をじつと見ている雅夫。

『まーくん、どうしたの?』

『うつん、舞ちゃんの姿とカブッてね』

『これ、お母さんのエプロンなんだよ』

『そうなんだ』

『これを着けてると、お母さんと一緒に料理してる気がするんだ』
炊飯器のご飯も炊き上がり、テーブルの上に献立が並んだ。

『いただきます』

『ほんと麗奈ちゃんは料理うまいよね』

『お母さんに鍛えられたし』

『麗奈ちゃんの料理が毎日食べられたら幸せだよなあ』

『でしょ〜』

『ご飯の硬さもちょうどいいし、おかずの味付けもオレ好みなんだよね』

『お母さんって、まーくんに料理作ったりしてたの?』

『何回かあったよ。その時もハンバーグだったよ』

『どっちが美味しい?』

『どっちも美味しかったよ』

『優柔不断っ!』

『えーっ!この前と違うじゃん!』

『ここは麗奈ちゃんのが美味しかったよって言わないと。優柔不断な人にはご飯作ってあげないよーだっ』

『それだけのご勘弁を』

第25話

食事が終わって、一緒に片付けをした。

『まーくん手際いいね』

『伊達に1人暮らししてないよ』

『お互いに？』

『ねっ』

風呂のお湯張りのブザーが鳴った。

『先にお風呂どうぞ』

『麗奈ちゃん先に入っていいよ』

『ここでは、まーくんがお客さんだし。なんなら一緒に入る？』

『えっ！』

『顔、赤くなってるよ』

笑って言う麗奈。

『もう、じゃあ先に入るね』

雅夫は慌てた様子で浴室に行った。

『ごゆっくり』

しばらくすると、

『バスタオル、洗濯機の上に置いとくね』

『あ、ありがとう』

麗奈の言葉にまだドキドキしている。

『お先に、いいお湯でした』

頭を拭きながら部屋に入ると、

『まーくん、これ見覚えあるでしょ』

『この浴衣は…』

舞が祭りの時に着てたものだ。

『ぴったりでしょ。着付けもお母さんに習ったんだ』

『淒く似合ってるよ』

『ほんとに？』

『うん』

『お祭りがあつたらよかったのに、季節はずれだね』

『来年の夏はそれ着て行こうね』

『そんな約束していいの?』

『大丈夫!』

『絶対忘れないからね』

『うん。麗奈ちゃんもお風呂入ってきたら?』

『覗いちゃだめよ』

『覗きません!』

麗奈は湯船に浸かりながら考えた。

…これ以上まーくに悲しい想いをさせたらダメだよ。今、まーくと離れたら今までみたいに強く生きられないよ。お母さん、どうしたらいいの?…

目から涙がこぼれた。麗奈の心は固まっていた。しかし、それを雅夫が受け入れてくれるかどうか、恋愛経験が無い故、駆け引きも対処もできないことに苛立ちさえ感じていた。

平常心を取り戻し、麗奈が風呂から上がった。

『そろそろ寝ようか』

『うん』

『布団は?』

麗奈はベッドを指差した。

『そつか。1人暮らしたもんね。オレは床で寝るよ。毛布があつたら貸してくれない?』

『一緒に寝よ』

想定外の麗奈の言葉に戸惑う雅夫。

『それはマズいよ』

『何がマズいの?』

『いや、ほら、その…』

『私、まーくんだったら平気だよ…だから一緒に寝て欲しいの』

麗奈は雅夫に嫌われるのを覚悟で、意を決して言った。

『うん…』

雅夫はそれ以上、何も言えなかった。灯りを消して、2人はベッドに入った。

『一緒に寝るのって、お母さん以来だよ』

『……』

『まーくん、寝た？』

『ううん、起きてるよ』

『近付いていい？』

麗奈が寄り添ってきた。雅夫は腕枕をして、麗奈の髪を撫でている。

『まーくん、暖かいよ』

随分昔に舞を抱いた感覚が甦ってきた。

『ゆっくりおやすみ』

理性のレベルを最大にした雅夫は、麗奈の額にキスをした。

『うん、おやすみ』

麗奈は雅夫にしがみついて寝息をたてている。

その夜、雅夫の夢に舞が出て来た。

…まーくん、麗奈を幸せにしてあげてね。まだまだ子供な所もあるけど、ほんと素直でいい子だから。私がまーくと過ごした幸せな時間を麗奈にもわけてあげてね…

麗奈の夢にも舞が出て来た。

…麗奈、会えてよかったね。まーくんは絶対あなたを幸せにしてくれるから、ちゃんとついていきなさい。一生手放しちゃダメよ。お母さんみたいに後悔するから…

朝が来た。

『おはよう』

『おはよう、まーくん』

『あのさ』

2人同時に話した。

『麗奈ちゃんからどうぞ』

『いや、まーくんから』

『夢に舞ちゃんが出て来たんだ』

『私の夢にもお母さんが出て来たよ』

お互いに夢の中身を話した。

『お母さん、私達のこと、あの世でも心配してるんだね』

『舞ちゃんらしいよね』

『おでこのキス、すごく嬉しかったよ。あんなこと言ったけど、エツチされたらどうしようって内心ドキドキしてたんだから』

『言われたこっちがドキドキだよ。麗奈ちゃんは大切な人なんだから、まずは心から信頼し合えるようにならないとね。エツチなんかその後でいいと思うんだけどな』

第26話

「私、まーくんにとって大切なの？」

「大切というか…宝物だね」

「そんなこと言っと、本気にしちゃうぞ」

「参ったなあ」

「なにそれっ！」

「嘘だよーんっ」

「ご飯食べたら、一緒に来て欲しい所があるんだけど」

「どこ？」

「来ればわかるよーん」

麗奈は雅夫に買って貰った服を着て出かけた。

車を走らせ、眼下に相模湖が見渡せる墓地に来た。麗奈は中に入り、

奥の墓石の前で止まった。

「麗奈ちゃん、ここは？」

「お母さんのお墓」

「ここに舞ちゃんが眠ってるんだ…」

2人で手を合わせてると、麗奈が雅夫の方に向いた。

「まーくん、いや、雅夫さん」

「は、はい」

「私と結婚して下さい」

「な、何、いきなり」

「私はお母さんみたいに立派じゃないけど、まーくんと死ぬまで一緒に幸せでいたい。きつと、お母さんもまーくんなら安心すると思っし」

「オレ達って親子ほど年が離れてるんだよ」

「年は関係ないよ。私じゃ嫌？」

「嫌じゃないよ。ただ…」

「ただ？」

『オレの方が絶対早く死ぬし、麗奈ちゃんにはこれ以上寂しい思いをさせたくないんだ』

『大丈夫。お母さんが死なせないよ。手紙に書いてあったじゃん。私の分まで長生きしてねって。私、まーくんじゃなきゃダメなの。お母さん、いいよね』

麗奈は全身のエネルギーを使って、雅夫にプロポーズをした。

雅夫も、麗奈と結婚することがお互いにとって一番の選択肢であることは間違いないと思っていた。麗奈の言葉に背中を押された雅夫は姿勢を正して、

『麗奈さん』

『は、はい』

『僕と結婚してもらえますか？』

『はいっ！、喜んで』

『舞ちゃん、麗奈ちゃんを宇宙一幸せにするから、安心してね』

舞の墓前で2人は誓いのキスを交わした。

『お母さん、私、まーくんに一生ついて行くね。これ、まーくんが買ってくれた服だよ。似合うでしょ。まーくん、お母さんより私のほうがかわいって言ってたんだよ』

『舞ちゃんのほうがかわいって言ったもん！』

2人は墓地で騒いでいた。

帰りの車の中、

『さっき、宇宙一幸せにするって言うてくれたよね』

『うん』

『ほんとに？』

『舞ちゃんの前で約束したんだから、嘘はつかないよ』

『ありがと』

麗奈が泣ぐんでいる。

『2人の物語は始まったばかりだよ。誰もが羨むくらいのエピソードを書けるよう幸せになろうね』

麗奈の手を握ると、静かにうなづいた。

『麗奈ちゃん』

『何？』

『学校のことだけど…』

『まーくんは私が高校中退でも構わない？』

『全然構わないよ』

『だったら、辞める』

『そつか、じゃあ手続きしないとね』

『うん。あと、まーくんに会ってもらいたい人がいるんだ』

『誰？』

『智美なんだけど』

『幼なじみの？』

『智美にはちゃんと報告しとかないと』

麗奈は智美に電話した。

『麗奈、今どこにいるの？』

『八王子に帰ってきたよ。今日、暇？』

『暇だけど、どうしたの？』

『学校終わったら、私んちに来て』

『わかったわ』

『じゃあね』

夕方、学校を終えた智美が麗奈の家に来た。

『麗奈あ、いきなり家に来てって…』

部屋には麗奈と雅夫がいた。

『あつ、こんにちわ』

『初めまして。大下雅夫です』

『こちらこそ初めまして。山中智美です。いつも麗奈から写真を見せられてました』

『そうなんですか』

『写真のまんまですね。びっくりしました』

『ハゲでもデブでもなかったでしょ』

『ハゲ？デブ？』

『いやっ、あのー、麗奈っ！何言ってるのよ』

智美は真っ赤になった。

『智美はね、写真のまーくんが何年も経ってるからハゲててデブになってるって言ってたのよ』

『すいません…』

『ははっ。普通に考えればそういうもんですよ。智美さん、気にしないでくださいね』

『ほんと、ごめんなさい』

『あのね、智美』

『どうしたの？』

『私、学校辞めることにしたの』

『嘘っ！？』

『ほんとに。あと、まーくんと結婚することになったから。智美にそれを伝えたくて家に来てもらったの』

いきなりの報告に戸惑う智美。

『大下さん、本当ですか？』

『ええ、話がトントン拍子に進んで…麗奈ちゃんの言う通りです』

『学校辞めてしまうのは悲しいけど、おめでとう』

『智美は私が学校辞めても、ずっと親友でいてくれる？』

『当たり前じゃん。どこに行っても麗奈は親友だよ』

『よかったあ』

『麗奈、久々にカラオケ行く？理恵と麻美も呼んで』

『行きたいけど…』

麗奈は雅夫の顔を見た。

『行っておいでよ』

『何言ってるんですか？大下さんも一緒ですよ』

『えっ？一緒に？』

『みんなにも紹介しないと。ねっ、麗奈』

『うんっ！私の旦那様を見てもらわなきゃ』

智美は麻美と理恵に連絡をとり、3人はカラオケボックスに向かっ

た。

翌日、退学手続きを済ませ、積めるだけの荷物を車に積んだ。

『よし、出発するよ』

『うん』

『ねえ、あれは？』

智美を先頭に、麗奈の同級生が見送りに来てた。

『おめでとう』

『お幸せにね』

『麗奈あ、バンザイ』

『みんな、ありがとう。ありがとうね』

『いい友達だね』

『うん』

『辞めて後悔してるんじゃない？』

『…ちよつとね。ちゃんと幸せにしてよっ！まーくん』

『オレも幸せにしてね、麗奈ちゃん』

『せーのっ』

『はっいつ』

2人は大声で言った。

第27話

福岡に戻ってきた2人は、雅夫の実家に行った。

『ただいま』

『おかえり…って…あら、あなたは』

『先日はありがとうございました』

『紹介す…』

『桜田麗奈です』

麗奈は自己紹介した。

『覚えてるかなあ、高校の時によく遊びに来てた…』

『はいはい、唯一あんたの彼女だった桜田さん？』

『唯一は余計だよっ』

『その娘です』

『おいくっ？』

『16です』

『お母さんは元気なの？』

『あとで話すよ』

『私が中1の時に亡くなりました。こういうことは、ちゃんと話しておかないとね』

『しっかりした娘さんだこと。ところで、あんたが来るってことは何かあるんでしょ？』

『オレ達結婚することになりました』

『えっ！？ちよつとお、お父さ〜ん』

『うるさいなあ、そんな大声出さなくても聞こえるっての。おや、雅夫、おかえり』

『お邪魔してます。桜田麗奈です』

『こりやまた綺麗なお嬢さんだこと』

『結婚するんだって』

『誰が？』

『この2人が』

『…ばあさん、ぼくとしてないで酒、酒。あと、寿司頼んで』
両親のドタバタに雅夫と麗奈は顔を見合わせて笑った。

麗奈と両親は打ち解けた様子で、ひとまず雅夫は安心した。

『麗奈さん、雅夫をよろしくお願いしますね。私達を実の親と思っ
て何でも言ってくださいね』

『ありがとうございます』

『上の部屋、掃除しといたから』

『ありがとう』

『片付け手伝います』

『今日はゆっくり休んで、明日の朝、一緒にご飯作りましょう』

『はい、おやすみなさい』

『おやすみなさい』

『ごめんね、なんか漫才みたいな両親で』

『ううん、ほんと面白いよね』

『疲れたろ?』

『大丈夫だよ』

『あつ、そうだ。確かここに…あつたあつた』

戸棚の奥から小さな箱を取り出した。

『左手をだして』

『こつ?』

雅夫は麗奈の薬指にダイヤの指輪をはめた。

『よかった。サイズぴったりだ』

『これは?』

『小6の時に死んだおふくろの形見』

『まーくんのお母さんも亡くなってんの?』

『うん、今いるのは高校んときに親父が再婚した人』

『そんな大切な物…』

『大切な物だからこそ、麗奈ちゃんに持ってもらいたいんだ。これ
がオレの精一杯の気持ちだよ』

『まーくんの気持ちに応えられるように、私、頑張るね』

雅夫は麗奈を抱き寄せた。

『私、お母さんを超えられるかなあ』

『もう、超えてるよ』

『ほんとに？』

『うん』

麗奈と雅夫の母が朝食を作っている。

『料理が凄くうまいのね。私が教えること何もないわ』

『そんなことないですよ。母から教わってないこと、山ほどありますから』

雅夫が起きてきた

『おはよう』

『おはようさん』

雅夫の父も起きてきた。

朝食を済ませ、麗奈が片付けをした。

『家はどうすんの？』

『当分は今の所に住むよ』

『式は？』

『日取りは1月28日で決めてる。場所はこれから探すよ』

『そうかい』

『そろそろ帰るわ』

『お邪魔しました』

実家を出て、

『ちよつと寄りたい所があるんだけど』

『どこ？』

『この前行った学校』

『どうしたの？』

『この事を話さなきゃいけない人がいるんだ。麗奈ちゃんは今車で待っていて。後で呼びに行くから』

『うん』

高校に着いて、校舎に入って行った。休日の静けさの中に、楽器の音が響いてる。

事務室で呼び出してもらい、唯が音楽室から下りてきた。

『あーっ、雅夫君？』

『お久しぶりです。唯先生』

『もお、先生はやめてよ。恥ずかしいな。まあ、立ち話もなんだから』

会議室に通された。

『何年振りかしらね』

『かれこれ１７～８年になりますかね』

『元気でやってるみたいだね』

『お陰様で』

『で、どうしたの？』

『実は、会ってもらいたい人がいて』

『誰？』

『車で待たせてるんで、連れてきますね』

麗奈を連れて、会議室に戻ってきた。

第28話

『舞…』

『麗奈ちゃん、お母さんのお姉さんだよ』

『桜田麗奈です』

麗奈は会釈をしながら挨拶をした。

『子供が産まれたのは聞いてはいたけど…舞の高校時代にそっくりだわ。ところで、舞は元気なの？』

『母は…』

麗奈はうつむいてしまった。

『舞ちゃんはガンで4年前に亡くなりました』

雅夫が答えた。

『死んだって…しかも4年も前にだなんて…なんで今まで教えてくれなかったのっ！』

強い口調の唯の声は会議室全体に響き渡った。麗奈は尚もうつむいたままだ。

『舞ちゃんの遺言で、親兄弟には知らせるなと…』

雅夫が静かに言った。

『…そうなんだ』

『ええ、麗奈ちゃんには二の舞を踏んでほしくないって言ってたらしいです』

『そっかあ、あの子、雅夫君と別れた日から、泣きっぱなしだったから…私は舞に何も言ってやる事ができなかった。親の意見に背いても、私が雅夫君との恋を成就させてあげるべきだった…』

唯は親寄りの人じゃなかったんだと、麗奈は感じた。

『ご両親はお元気ですか？』

『お父さんはオーストラリアの現地法人で社長やってるわ。お母さんもついて行ってるの』

『そうなんですか。あの、いきなりなんですけど、僕たち2人、今

度結婚することになりました。それを知らせに』

『何だか雅夫君と舞を見てるようだわ。舞…麗奈ちゃんを残して、さぞかし心残りだったろうに…』

『唯おばさん』

麗奈が口を開いた。

『私達を、これからもよろしく願います』

ぺこりと頭を下げた。

『麗奈ちゃん、最高の人を射止めたわね。雅夫君、舞に代わって言うわね。娘をよろしく願います』

『はい』

『後輩の練習でも見に来る？』

『いえ、また改めて来ます。今度はうるさい連中と一緒に』

『西山君とりっちゃんのこと？来年はコンクールで九州代表狙ってるから、ビシッと指導に来てね』

『はい』

『結婚式にはちゃんと招待してよ』

『もちろん。案内状送りますね。お父さんお母さんにもよろしく伝えてください』

『わかったわ。2人共、びっくりするわね。あつ、麗奈ちゃん』

『はい？』

『ほんとは、おじいちゃんもおばあちゃんも悪い人じゃないから。誤解しないでね』

『わかってます。私のお母さんの親ですから』

学校を出て、雅夫の家に戻って来た。荷物を降ろして、部屋に運んだ。

『やっぱり狭いなあ』

『2人だもん、いいんじゃない？あつ、そうだ。まーくん、写真立てある？』

『写真立て？ちょっと待ってよ』

机の引き出しの中を探してみると、古い写真立てが出てきた。

『これでいい?』

『うん、ちよつと貸してね』

麗奈は裏を開け、写真を中に入れた。

『はい』

雅夫に渡した。中身はこの前、麗奈と撮った鶴見岳での写真だった。
『まーくんを学校で待つてる時に、向かいのコンビニで写真にしたんだ』

舞との写真の隣に、麗奈との写真を並べて置いた。

『こつやつて見るとなんか不思議だね』

親子が同じ相手と同じ場所で撮った写真に向かって、雅夫は言った。
『うん。私ね、こつちに来る前に髪型をお母さんと同じにしたんだよ』

『そうだったんだ。それまではどんな髪型だったの?』

『黒のストレート』

『へえ』

『まーくんに気に入ってもらおうと思ってね。この、けなげな乙女心、わかるかなあ』

『美容室の人に、失恋したんですかって言われなかった?』

『そういう人、今時いないよ』

『そうなの?』

『うん、そういえば、結婚式の日…』

『1月28日?麗奈ちゃんの誕生日』

『何で知ってんの?』

『退学手続きの用紙に書いてるのを見ちゃった。人生最大のイベントは、人生最愛の人のバースデイにしようと決めてたからね』

『もしかして、アニバーサリー男?』

『恐怖・アニバーサリー男お』

『キヤーツ』

『麗奈ちゃんも乗るねえ』。そうすれば、結婚記念日、絶対忘れないでしょ』

『忘れたらドロップキックだからね』

『いくらボケても、これだけは忘れないよ』

残りの有給は式場の手配と衣装合わせ、案内状の作成と目まぐるしく過ぎていった。

有給が終わり、久々の出勤。

『はい、お弁当』

『サンキュー』

『忘れ物ない?』

『大丈夫』

『行つてきまゝす』

『いつてらっしゃい…まーくんまーくん、忘れ物っ!』

『何?』

麗奈が口をとがらせる。

チュッ

『じゃあね』

『いつてらっしゃい。早く帰つて来てね』

健四郎が雅夫を昼食に誘った。

『ごめん、今日から弁当持ちだから』

『弁当?どうしたの?』

『この度、結婚することになりました』

『おめでとう!で、相手は三沢?』

『何でだよ』

『いや、三沢はお前のこと好きだから』

『彼女とはこれからも、いい友達だよ』

『可哀想に、三沢の婚期がまた送れるな』

『いいんだよ。1回結婚してるんだから』

律子がこの場にいたら、2人共頭を叩かれてるに違いない

『じゃあ、誰なんだよ。結婚相手は』

『麗奈ちゃん』

『麗奈ちゃん？聞いた名前だけど』

『舞ちゃんの娘』

『なにーっ！』

『同棲してまゝす』

『マジっすか？』

『てな訳で仕事終わったらソッコー帰るんでよろしく』

『凄い変わり様。とりあえずはおめでとう』

『じきに案内状届くから、出席よろしく。あつ、あと友人代表のス

ピーチ、頼んだよ』

『暴露話？』

『余計なこと言ったら張り倒す！』

『へいへい』

第29話

2人の生活が始まって2ヶ月が過ぎた。

『生活には慣れた？』

『うん、安いスーパー見つけたし、2人分の料理作るのも慣れたきたよ』

『今日はイブだし、外食しよう』

『賛成！』

『6時にインペリアルホテルのロビーで待ち合わせね』

『OK』

『行つてきまーす』

チュツ

雅夫のキスも慣れてきたようだ。

『行つてらっしゃーい』

日が暮れ、いつもより服装と化粧に気合いを入れた麗奈は、ホテルのロビーのソファーに座っていた。

『あ、来た来た』

麗奈が手を振って雅夫を呼んだ。

『待った？』

『こんな立派な所で待つてると緊張しちゃうよ』

『まあね、日頃来る所じゃないからね』

『まーくんは何度も来たことあるの？』

『初めて』

『なーんだ』

『いつも来てますよ。みたいな顔をしとけば大丈夫だよ。麗奈ちゃん、いつもは可愛いけど、今日は凄く綺麗だよ』

『智美に教えて貰ったメイクを実践してみたんだ』

『ほんと大人っぽいよ』

『いつもの私と大人っぽい私、どっちが好き？』

『両方好きだよ。どっちともオレの愛してる麗奈ちゃんに変わりはないもん』

『もおっ、そんなこと言われたら照れるじゃん』

『そろそろ行こうか』

雅夫が麗奈をエスコートしてレストランに入った。

『食事って』

『ここ』

料理本で紹介されるフレンチの有名店だ。

『予約をした大下ですが』

『お待ちしてりました。どうぞ』

テーブルに案内され、席に着いた。

『ワインは如何いたしましょう？』

雅夫はボーイにメモを渡して、

『これ、お願いします』

『かしこまりました』

麗奈はあつけにとられてる。

『私、フランス料理の食べ方わからないよ』

『オレの真似をすれば大丈夫』

小声で言った。

『お待たせしました。シャトー・ロザンの1989年でございます』

2人のグラスにワインが注がれた。

『今日は特別、少しなら飲めるでしょ』

『うん』

『メリークリスマス！』

『メリークリスマス』

グラスの重なり合った音で、ディナーが始まった。

『このワインはね、麗奈ちゃんと同じ年なんだよ』

雅夫がラベルを見せた。

『あっ、ほんとだ』

『今日はどうしてもこれを飲んでもらいたかったんだ』

『おっしやれー』

『こーやってると、私、お姫様になつたみたい』

『姫、お料理を頂きましょう』

『じい、苦しゅうない』

『ははーっ、って普通に戻っていい？』

『まーくんノリがいいから好きっ。エヘッ』

料理が次々に運ばれ、最後のデザートが来た。

『どう、美味しかった？』

『うん、初めて食べたけど、凄く美味しかったよ』

『お客様、お部屋のキーでございます』

『ありがとうございます』

『部屋って』

『余韻を味わいたいから、部屋もとっちゃった』

レストランを出て、エレベーターで最上階に登った。

ガチャ

扉を開けると、赤と緑にデコレーションされた部屋が現れた。

『すごーい！何これー』

部屋全体がクリスマススしている。テーブルの上にはケーキ・シャンパン・サンタクロースのぬいぐるみが置いてある。

『ねえ、サンタさんが手紙持ってるよ』

『ん？読んでみたら？』

麗奈は封筒を開けた。

merry Christmas

今まで頑張ってきた麗奈ちゃんにプレゼントがあります。

ぬいぐるみの背中のフラスナーを開けてみてね。

麗奈ちゃんのサンタさんは現れたかな？

サンタクロースより

麗奈はぬいぐるみの背中を開けて、箱を取り出した。中には指輪が2つ入っていた。

『これって、結婚指輪？まーくん、ありがとう』

『オレじゃないよ。サンタさんが麗奈ちゃんにつて』

『私、クリスマスはいつも1人だったし、サンタクロースも信じてなかった。でも、サンタさんつてほんとにいるんだね』

『うん』

『まーくん、左手だして』

麗奈が指輪をはめた。そして、雅夫も。

部屋を暗くし、ガラス越しに夜景を見ていた。クリスマスイブと言っただけで、街の夜景もロマンチックに見える。

『ねえ…』

『ん？』

『私、初恋の人と一緒になれて最高に幸せだよ』

『オレは心のどこかで、舞ちゃんといつかどこかで逢えると信じていた。だから、今まで恋すらできなかった。舞ちゃんが麗奈ちゃんを残してくれて、これが運命なんだと、初めて逢った時に確信したよ。舞ちゃんには悪いけど、あくまでも過去の人なんだよね。これからは麗奈ちゃんを舞ちゃんの代わりじゃなくつて、ずっと愛していくよ』

『お母さんじゃなくつて、ほんとに私でいいの？』

『麗奈ちゃんじゃなければ…オレの愛は貰けない』

雅夫は麗奈の顔をじつと見た。

『まーくん…』

『何も言わなくていいよ』

2人は熱い口づけを交わし、雅夫は麗奈を抱えてベッドに行った。

『私、初めてだから…』

雅夫は麗奈の唇に人差し指をつけて、静かにうなずいた。

『オレに任せて…』

麗奈は少女から女性の階段を登っていった。

ベッドの中で雅夫は腕に抱いている麗奈に聞いた。

『大丈夫？痛くなかった？』

『…痛かったよ。でも、これで私も大人の女だね』

『オレは舞ちゃんに男にしてもらったんだよ』

『代々引き継いでるんだね…』

『舞ちゃんより、麗奈ちゃんの方がスタイルいいよ』

『まあ、バカッ…まーくんのエッチ』

麗奈が抱きついた。

『ずっとこうしていたいね』

『裸で？風邪ひくよ』

『麗奈ちゃんはムードって物がないのね』

『まーくんはムードよりヌードでしょ？』

『ダメだこりゃ』

『嘘だぴょん。私もずっとこうやって、まーくんの温もりを感じていたいよ』

麗奈が雅夫にキスをした。

翌朝、チェックアウトした2人は、

『今日は仕事納めだから、早く帰るよ』

『うん』

雅夫は仕事に、麗奈は自宅に戻って行った。

第30話

新年は、雅夫の実家で迎えた。

『明けましておめでとうございます』

『今年もよろしく願います』

各々、挨拶を終わらせると、

『麗奈さん』

雅夫の母がお年玉を渡した。

『あつ、そんな…私は…』

『うちでは、20歳までお年玉をあげるようになってるのよ』

『まーくん…』

『せっかくだし、もらっとけば？』

『これは、麗奈さんの為に使ってね。生活費は雅夫が稼いでるんだから』

『ありがとうございます』

『みんなで初詣に行こうか』

近くの神社にやって来た。

『明けましておめでとう』

健四郎一家も来ていた。

『今年もよろしく。相変わらず奥さんお綺麗で…』

『なにバカ言ってるのよ』

健四郎の妻は後輩の綾子だ。かれこれ20年来の付き合いになる。

雅夫は麗奈を呼んだ。

『紹介するね。今度結婚する麗奈』

『麗奈です。よろしく願います』

健四郎と綾子はびっくりした。

『ほんと、うり二つだよ』

『桜田先輩にそっくりね』

『そりゃ、親子だからね』

『お前が惚れるのも無理ないな』

『麗奈ちゃん、仲良くしてね』

綾子が言った。

『はい、こちらこそよろしくお願いします』

『じゃ、会社で』

『じゃあな』

健四郎らと別れて、お詣りをした。

『まーくん、何を願ったの？』

『麗奈ちゃんが浮気しませんようにって。麗奈ちゃん？』

『まーくんの生命保険が早く受け取れますようにって』

『新年早々ボケまくりだね』

『えっ、私マジだよ』

『……』

『もう、そんな訳ないでしょ？まーくんといつまでもラブラブでい
られますようにってお願いしたよ。それに、お願いしなくても浮気
なんてしないよ』

『オレもほんとは、仲良く暮らせますようにってお願いしたんだ。
神様がやきもち妬くから帰ろうか』

『うん』

2人は家に帰って行った。

『ばあさん、あの2人、わしらを忘れてるよ』

『それ位仲がいいってことなのよ。お父さん』

両親も家へ帰って行った。

親戚に挨拶を済ませ、雅夫と麗奈は自宅に戻って来た。

『疲れたね』

『うん、やつとまーくんと2人になったよ』

『これから親戚付き合いが大変だと思うけど、よろしくね』

『今までそういうの全然なかったからね…一つ一つが勉強になるよ』

『そう言ってもらえると気が楽だよ』

『あつ、そうだ。麗奈ちゃんに書いてもらいたいものがあるんだけど』

『私、字上手くないよ』

『上手下手は関係ないよ。要は気持ちかな?』

雅夫はカバンの中から婚姻届を出した。

『これは...』

『一緒に住んでるし、入籍は先に済ませたほうがいいかなって』

『私達、これで正式に夫婦になれるんだね』

『引き返すなら今のうちだよ』

『まーくんは、どうなのよ?』

『オレは、この前も言ったけど、麗奈ちゃんと初めて会った時から結婚するつもりでいたし』

『誓いますか?』

雅夫は右手を挙げて言った。

『はい、神と舞ちゃんに。麗奈ちゃんはどんなのよ?』

『私はまーくん結婚とする為に生まれて来たから』

『誓いますか?』

『はい、神様とお母さんに』

『では、誓いのキスを』

チュッ

『もしかしたら、私達ってバカップル?』

『バカップルじゃなくて、宇宙一ラブラブなカップルだよ』

『出た!まーくんお得意の宇宙一シリーズ』

『これ書いたら明日、一緒に役所に出しに行こうね』

『うん』

翌日、2人で婚姻届を提出し、桜田麗奈から大下麗奈になった。

『大下麗奈か?なんか照れくさいな』

『死ぬまでこの名前でいくんだよ』

『そう考えると緊張してきた。でも、まーくんの奥さんとして生きていけるんだもん。最高に幸せだよ』

『ありがとう』

『それだけ？』

『他に何？』

『欲しい服があるんだ。入籍記念に買って欲しいなあ』

『お年玉もらったじゃん』

『あれは、貯金しとくの』

『よっ、しっかり者の奥さん』

『レッツゴー！』

2人は少し遅めの初売りに出かけていった。

第31話

結婚式当日。

純白のウェディングドレスに包まれた麗奈は、新婦の控室にいた。

『お母さん、まーくんと結婚式ができるよ。本当なら、まーくんの隣にいるのはお母さんだったのね。お母さんの分まで幸せになるから見守っていてね』

舞の遺影に話しかけていた。

ノックがして、雅夫が入ってきた。

『今、お母さんに挨拶してたの』

『そうかあ』

遺影の舞の顔がいつもより笑って見える。

『麗奈ちゃん』

『な〜に?』

『綺麗だよ』

『ありがとう』

『コンコン』

『はい』

雅夫がドアが開けると、舞の両親が立っていた。

『お母さん…』

『雅夫君、本日はおめでとうございます』

『あ、ありがとうございます。さ、どうぞ中へ』

両親は部屋の中に入り、

母親は麗奈が持っていた舞の遺影に話しかけた。

『ごめんね。舞の気持ちも考えないで、勝手なことを言って傷つけてしまった。唯に舞のこと知らされるまで、何も知らなかった』

隣にいた舞の父はただただ黙って遺影を見つめている。

『舞、私を許してね』

涙を流して母は舞に詫びた。父は遺影に頭を下げていた。

『お母さん、舞ちゃんはもう許してますよ。こうやって会えたんですから』

『雅夫君、私が舞にあんなことを言わなければ…』

雅夫は静かに首を横に振った。

『もついいんですよ。舞ちゃんとの交際をちゃんと認めてくれたのはお母さんですもんね。そんなに自分を責めないで下さい』

麗奈は初めて知らされる事実には驚いた。

『まーくん、そうなの？』

『うん。お母さんには「雅夫君、雅夫君」って可愛がって貰ってたんだよ』

『お母さんから聞いてなかった…』

麗奈は意外な事実を知らされて、びっくりした様子だ。
舞の母は麗奈の手を握った。

『麗奈ちゃん』

『はい』

『今までいっぱい苦労かけちゃったね。ごめんね』

『おばあちゃん、私は…』

『お母さんはいないけど、雅夫君は凄くいい人だから安心してついていってね』

『おばあちゃん、おじいちゃん、ありがとう。おばあちゃんがお母さんを産んでくれたから、私が産まれてまーくんに出会えたんだもの。これからも私のおばあちゃんとおじいちゃんできてね』

『麗奈ちゃん…』

麗奈は舞の父母と手を握り合った。

『雅夫君』

父が雅夫に向いた。

『はい』

『孫の麗奈を、よろしくおねがいします』
深々と頭を下げて言った。

『はい、舞ちゃんの分まで、必ず幸せにします』

父と雅夫は堅い握手を交わした。

『参列者の方々は式場の方へお願いします』

アナウンスが流れた。

舞の父親が麗奈と腕を組み、バージンロードを歩いて雅夫に渡された。

牧師の柔らかな低い声が教会を包む。

神の前で誓いのキスを交わし、式は滞りなく終了した。

教会の扉が開き、鐘が響く中、無数の白鳩が飛び立って行った。ライスシャワーの祝福を受け、ブーケトスをした。麗奈の放ったブーケは、律子が受け取った。

『三沢、次はお前か？』

健四郎がちやかす。

『そうねえ、もう一回私も結婚しようかしら』

『相手は？』

『ヒルズ族でも捕まえるわ』

『残念だったな』

『何が？』

『大下のこと』

『うん。でも、いいんだ。先輩には私の気持ちを打ち明けたし。スツキリしたよ。結婚しても、私の心の中には先輩はいるからね』

『大下と同じこと言ってるし。それに、そんなことあいつから何も聞いてないぞ』

『見てよ。あの幸せそうな顔。舞ちゃん先輩の娘じゃ勝ち目ないよ』

『あいつは見た目チャラチャラしてるけど、恋愛はバカが付くくらいの一途な奴だからな』

『そういうところが魅力的なんだよなあ』

『何2人でゴチャゴチャ言ってるんだよ！』

雅夫がやって来た。

『ようやくお前も結婚できたな。おめでとう』

『飲み会で帰って来ると思ったら結婚式だもんね。先輩、おめでと

「うございます」

「ありがとうございます」

麗奈もやって来た。

「麗奈ちゃん、おめでとう」

健四郎が言った。

「ありがとうございます」

「たまには旦那を貸してね」

「はい」

「舞ちゃん先輩、きつと喜んでるよ。先輩と末永く仲良くしていつてね。私みたいにバツがつかないように」

「りっちゃん、縁起の悪いこと言わないの。オレが別れる訳ないっしょー!」

「先輩が離れなくても、麗奈ちゃんが愛想つかすかもしれないよ。いつまでも若々しくしとかないとね」

「それはあるかもしれないですね。律子さん、ありがとうございます」

麗奈と律子はお互いにピースをした。

「この2人を一緒にしとくと、お前も歯がたたないな」

「ああ、舞ちゃんとりっちゃん、こういう光景があったよな」

雅夫と健四郎は、高校生の時の舞と律子を思い出し、麗奈にリンクさせていた。

「もうすぐ披露宴が始まるから、会場にいきましょう」

披露宴会場には、雅夫側は親族、会社関係、友人が、麗奈側は舞の両親、唯、智美の家族が集まった。

「只今より、大下家・桜田家の結婚披露宴をとり行います」

雅夫の会社の社長の乾杯の音頭で披露宴が始まった。

「新郎の高校時代からの友人であります西山健四郎様、スピーチをお願い致します」

かなり緊張した面持ちで健四郎がスピーチを始めた。

『大下君、麗奈さん、ご結婚おめでとうございます。大下君は仕事は超一流ですが、恋愛に関しては全くの素人でございます。こんなに美しい麗奈さんを射止めたのは、正に奇跡です。麗奈さん、大下君をその若さと美貌で引つ張って行ってくださいね』

スピーチを終え、健四郎が席に戻った。

『ありがとうございます。続きまして、新婦の幼なじみの山中智美様、スピーチをお願い致します』

きらびやかな衣装の智美は、颯爽と前に出てきた。

『大下さん、麗奈、ご結婚おめでとうございます。麗奈、長年の夢が叶って良かったね。今まで私にベツタリだったけど、これからは大下さんにベツタリ寄り添っていつまでもラブラブでいてね。大下さん、麗奈は寂しがり屋だから、いつも傍にいてあげてくださいね』

両家の花束贈呈が終わり、最後に雅夫が挨拶をした。

『本日は、大下雅夫・麗奈の結婚披露宴に参列頂き、誠にありがとうございます。ご存知だと思いますが、麗奈は私のかつての恋人だった桜田舞さんの娘です。舞さんは病に倒れ、残念ながらこの世にはいませんが、麗奈という素晴らしい人を残してくれました。これからは2人、力を合わせて幸せに向かって頑張っていく所存でございます。皆様のご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い致します』

全員の拍手の中、披露宴も無事終了した。

明日からのハネムーンに備えて2人は空港近くのホテルに泊まった。

『いやあ、疲れたね。やっと終わったよ』

『もうヘトヘトだよ』

ベッドの上に大の字になった雅夫に、麗奈が覆い被さった。

『まーくんの友達、みんないい人だね』

『麗奈ちゃんの友達も来ればよかったけど』

『みんな学生だからね。仕方ないよ』

『旅行から帰ったら、麗奈ちゃんの友達集めて八王子で披露パーティーでもしようか?』

『いいの?』

『もちろん。お墓に行つて、舞ちゃんにもきちんと言ひ報告しないといけないしね』

『そつえば、今晚が新婚初夜になるんだよね』

『今夜は寝かせないよお』

『もう、まーくんたらあ』

『一緒にお風呂入ろうか？』

『うん』

バスルームに行つた2人は服を脱いだ。

『やっぱり麗奈ちゃんは、舞ちゃんより胸大きいよね』

『バーカツ、どこ見てんのよ！エッチ！』

『どつて、ここ』

パシッ

『今はダメツ。あ・と・で』

『痛えなあ…』

2人の夜は長く続いた…

あの日の君へ

愛する意味を覚えてくれた。生きる素晴らしさを教えてくれた。そして、かけがえのない命を育み、分け与えてくれた君へ、ありがとう…

セカンド・ラブ…終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8387b/>

セカンド・ラブ

2010年10月11日01時14分発行